

主幹・麻生路郎

川柳雑誌

十月號



乃 葭 ぎつを酒いし欲もてめ止し欲でん吞

大正十三年三月三日第三種郵便物認可

昭和七年十月一日發行(毎日一回一日發行)

第九卷 第十號

川柳雜誌社發行

の金掛限有に爲の族家御

險保身終



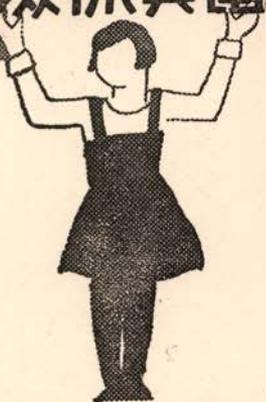
にめたの後老

險保老養



に費育教

險保資蓄



命生本日

目丁四橋今區東市阪大

十月例会

日時 十月八日(土)午後六時半

會場 大阪市南區千年町(市電
日本橋停留場西辻北入)
ちこせ俱樂部
電話南二四五番

兼題 「鍋」三句 麻生路郎選

兼題 「辛抱」三句 尼縁之助選

會費 金參拾錢

初心者の來會を歡迎致します

加茂川句會

日時 十月廿一日(金)午後六時半

會場 仲源寺(京都四條繩手東入)

兼題 「髮」三句 山雨樓選

兼題 「財布」三句 新水選

會費 金參拾錢

京都市七條大宮東入桑原方

京都支部

各地支部増設

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込んで下さい。

川柳雜誌 第九卷第十號目次

文苑

柳壇時事 麻生路郎(三)

武玉川初篇研究(五)

梅本秋農屋
森東魚(九)
蛭子省二

柳の絮(八) 長野吉高(六)

嘘ミ眞實 松丘町二(三)

千日前今昔史(三) 木村半文錢(七)

柿の皮 長野吉高(四)

于大隊長 岩崎柳路(四)

川柳忌に就て 柳林鮫(五)

街に住めば 高橋かほる(八)

月のない窓 尼縁之助(九)

思ふまゝ 平井汀華(三)

大地を護る人々 澄田羅門(二)

重荷をわろして 平岩司郎(三)

馬・馬・馬 松盛琴人(五)

創作

近作柳樽 麻生路郎選(四)

光耀抄 麻生霞乃選(五)

川柳塔 同人・社友(四)

粒々集 諸家(三六)

各地柳壇 家(三七)

一路集

(課題吟)

教會 安井ひろし選(四)

池 中見光路選(四)

幕 楊井二南共選(四)

飛燕往來 日野華水選(四)

編輯の窓 山雨樓(四)

西之町 綠雨(六五)

表紙 麻生路郎

題字 麻生路郎

柳壇時事

麻生路郎

南北氏隠退？

食満南北氏が番傘を脱退したとか、するとかいふことを耳にしたのは、餘程以前だったが、私は大しに氣にとめなかつた。と云へば南北氏に對して敬意を失してゐるやうに聞えるかも知れないが、決してさうではない。あれほどの川柳愛好者であり、廿有幾年を川柳のために、随分と力を入れてゐられたのであるから、幾ら出るの退くのと云つたところで、永年連れ添うた夫婦喧嘩のそのものやうに、何時の間にもやらの鞘に収まるものだと思つてゐたからである。

しかし、この私の考へは少しく早計をまねがれなかつた。

南北氏は敢然として番傘を去つてしまつた。しかし私としてまだ一緩の期待をもつてゐたのであるが、最近、事務所の方へ本誌の寄贈中止方を申出られた報告を手にして、遂に南北氏の堅い決心を知つた。

何が彼氏をさうさせたかといふ、よく流行つた言葉が私の頭に浮んだ。私の手許に届いた報告によれば「今は斯道に何の關係も無之原稿などもさしひかえ居る折柄心苦しいから寄贈を中止して貰ひたい」と云ふ理由からである。これは變だと思はざるを得なかつた。

た。なるほど番傘を脱退するといふことは南北氏の自由でもあり、又止むを得ないことでもあらうが、曾ては松竹の劇作を棒に振つてまでも愛好しつゞけてゐた川柳である。私の知る範圍に於ても川柳のために、又番傘のためには少なからざる力を盡された同氏のこゝろである。それがいかなる理由からかは知らぬが、本誌に對して迄「今は斯道には何の關係も無之」云々の如き一片の葉書となるには深い理由がなくてはならぬと思つた。

私は氏が川柳のために、又番傘のために少なからざる力を盡されたと書いたが、氏自身から云へば寧ろ、番傘のため、又川柳のためにと振り替へて云はれて然るべきだけの努力を傾倒されてゐたことは、少しく内情を知るもの、首肯し得るところであらう。

さうした南北氏であるから、番傘を敵腹の如くうち棄てる以上は、柳界をも同時に見限られる事はあまりに當然の事かは知らぬが去るものは追はず式に、南北氏の柳界隠退を見送ることは多年川柳に携つて來た、私としては黙視するに忍びない。そこに相當の理由があり、去らざるを得ないにしても、去るに際しては、その理由をあきらかにし、曾て西田當百氏が柳界を隠退せしが如く、隠退披露の一つもやつて、笑つて同氏を去らしめた

と思ふ。私は句の主張に於ては、同氏と相容れぬ點の多くを持つてゐたが、私交上は何等の嫌りをも持たず、殊に愚妻が、一時劇作に志したる時師事せしめたることもあつて、常に敬意を表しつゝあつた一人である。

然るにこの突然の柳界隠退を耳にし、あたかも路傍の人の如き態度をもつて同氏にのぞむのは、柳人として大いに羞づべき行爲ではあるまいか。

私かひそかに聞いてゐるのに、番傘の二十周年記念事業の一つであつた三越の川柳展覽會の問題で同氏と水府君との短冊の値段が同額であつたとか、又は徑庭があつたとかで南北氏の怒りに觸れたのだとか云はれてゐるが、事實の眞偽は知らぬが、幾ら南北氏でも、僅かその事だけで多年培つて來た番傘を脱退されるほど狭量でもあるまい。

假りに、さうした理由に端を汲したとしても、これ等は全く妥協し諒解し得ざる問題ではないからである。

水府君が番傘の主將であるとしての價額が一同人の南北氏の價額を凌ぐが如きは當然ではあるが、南北氏は番傘同人としてよりも、社會的に觀て、既に一家をなせる價額を更に附加せられるべき地位にある人である。短冊の價額は句の巧拙にあらずして、他の幾多の條件が按配せられて、決定せらるべきものであるから、若し南北氏にして右の理由の下に反對の意見を持して下らなかつたといふれば、これ又首肯し得ざることではない。

要は社會人としての敬意を拂ふか、拂はざるかの問題である。こゝに至つて問題はかなり重大となる。由來番傘は長幼の別を超越して、これを寧ろ一種の誇りとしてゐたが、はしなくも、社會人としての南北氏が短冊問題によつて、その非なるを切實に思はされたのである。その一端の罪は従來の南北氏の態度にもあらうが、後進は後進としての道をまもるべきではなかつたか。

曩に述べた如く、私としては單にこの問題のみが南北氏を怒らし、遂に番傘を脱退せしめたものとのみ考へられぬ。他の理由の存在することを知らるものではあるが、何れにしても南北氏が、柳界隱退の意思を醸さないとするだけのことを爲すべきではなからうか。

五葉追悼號を讀む

番傘の五葉追悼號は、大々的な豫告に反してまことに貧弱極まるものであつた。その雜誌が、ではない。その内容がである。

私の期待が大き過ぎたのかと思つて、他の人達にも聞いて見たが、他の人達の意見も私とあまり違らない。

あれ位な追悼號なら、わざ／＼九月號を追悼號にしなくても七月の六日に、なくなつたのであるから八月號を追悼號にすればいいのに、他誌が八月號でぞん／＼書き立て、かから出した追悼號としては誠に榮えない結果を招いてゐるといふやうな意見であつた。私としては、それが八月號であらうと九月

號であらうとそんな事はどうでもいゝが、もう少し五葉をハッキリさせて欲しかつたのである。

たゞ、お座なりな追悼號であつたことを五葉のためにも番傘のためにも、惜しむのである。

假へば、その表紙の装幀の如きを見て、額縁に喪章を附した點など、何んとか會の會長とか實業政治家の追悼號の觀がある。こゝにも五葉の味が出てゐない。凝り性の水府君としては思はざるも甚しいものである。何れも喪章などは要らぬから、五葉らしい一抹の淋しきを見て欲しかつた。それに、した喪章で追悼號をきかすよりも、五葉追悼號の文字が表紙上に欲しかつた。

執筆者としても水府君は勿論のこと、當百君等ばもつと／＼力を入れて書くべきではなかつたか。

殊に水府君の記事中、短詩社時代に江戸堀の路郎君の許へ五人が集つて、記念撮影をしたといふところがあるが、あれは江戸堀ではない。僕の助右衛門橋時代である。僕の江戸堀時代はズンと後のことである。その前住、上福島時代には既に青明君が死んでゐるし、助右衛門橋時代には僕は獨身だつたが、その後、僕には迂餘曲折があつて、東京時代から立賣堀、豊橋時代があり、(この時結婚)新川崎町時代があり、上福島時代(この時長女純子出生)があつて江戸堀時代になつてゐる。少しく大袈裟な云ひ方だが、斯うした歴史的事實はなるべく忠實に執筆すべきが筆者の責任

でなければならぬと思ふ。私はたゞ右の記事を讀んで氣づいたまゝを書いたので、決してがめだてをしてゐるのではないが、他の記事も又この調子であるとするれば、後人が五葉研究をせんとする時に、不必要な努力を費さればならぬ結果を生ずることを憂ふるのである。

私が斯うしたことを書くたびに、水府君の揚足取でもしてゐるやうに感じたりする人々があるかも知れぬが、それは思はざるも甚しいものである。今日古句考證などに専念されてゐる人々の多大の努力を知る、自分としては、又ひそかに歴史的研究をなし各種の文獻を流りつゝ、ある自分としては、日時、場所其他の事實に關しては筆者に於て、可及的努力を拂つて置いて欲しいのである。

尙五葉追悼號には東京の平瀬葛雄君、佐藤紫絃君、浪花銀行の東京支店にゐた人、木村半文錢君、馬場綠天君を煩はしたかつたと思ふそれに同じ銀行に勤務してゐた淡々君、姫小松君などにも住所がわかれば何か書いて貰へたらと思はざるを得なかつた。右に擧げた淡々、姫小松の兩君などは、住所がわからぬかも知れぬが、他の人々は辭を低くして依頼すれば幾ら多忙でも、又幾ら主義が違つてゐても、おそろしく書いてくれない筈はあるまいと思ふ。この意味から、五葉追悼號はあまりに貧弱であつたと云つても過言ではあるまい。とは云ふものの、同人諸君の同號編纂上の努力に對しては自分としても、感謝の辭を惜しむものではない。

愛の龍頭の乳首もつ母	片山津にて	同	同
水面の浮草へ三味を弾く女	東尋坊にて	大阪	愚陀
怒濤の愛にわれ疲れたり	母病む	同	同
氷割る手が氷に歪む		同	同
饒舌の腕がベツドに沈みある		同	同
惜しまれる男行李を買うて来る		大阪	かほる
金時を一つさ女らしく云ひ		同	同
仁丹が落ちてる夏の座敷なり		同	同
忘れるし如き酒なり獨り呑む		大阪	雅幽
女達の五目ならべに夏はゆく		同	同
藥効いても嬉しさのなき身なり	ある老人の死に	同	同
斷末魔酸素一瓶吸ひ得ざる		鳥取	鐵洲
悪性さ稱し博士に藥なく		同	同
雨の音今逝く人の餞ぞ		同	同
兒は跳ねてく八月過したり		同	山雨樓
川柳の味方味方だ蟲の聲	鳴門觀潮	同	同
小豆島潮に流れて來さうなり		同	同

者な于迺宣(令息)がカタログと一緒に偶然持つて居た「川柳雑誌」を手に取り、頁を繰り始めた。私は何んで解るものかと黙つて見て居ると、于迺宣曰く此の本は俳句の本でずかと云つた我然私は嬉しくなつて大隊長は俳句がお解りですかと問へば作らぬが、東京で在學中お國の書物を澤山讀んだ。俳句の書物も度々圖書館で讀んで佳い詩だと思つたとの事、私は俳句と川柳の相違を簡単に少し計り話し、同じ五七五調でも俳句より佳き優れた進んだ短詩である事を付言した。一寸解つて呉れたらしい。揮毫も出來ぬと云ふ評判の子司令官の手前もあり、私はいゝ加減に切り揚げて大隊長に「川柳雑誌」の七月號を、さうぞよく御覽下さいと云つて贈呈した。大隊長喜んで有が度うを二回繰り返し、お國の詩は佳いですねえと仲々ツヨサイの無いお言葉私は又最敬禮をしたら、門迄わざわざ送つて自用の馬車に乗せて呉れた。

支那宿へ歸つてから朗かな氣持で、パイチューを呑んで考へた。本當に俳句を知つて居るのかしら……そしたら川柳も解つて呉れるであらうと今でも時々其の時のシーンを思い出して、今も松代と其の語をして今日日はパイ酒でなく久し振りで日本ビールを呑んで又朗な氣持になつて居る。

(大同元年九月四日、孔子の記念日誌)

川柳忌に就て

柳 林 藪

MSB氏「ふあうすと」誌上は一言ふ。

思ふまゝ

平井汀 華

其の頃俺は近所にある玉突屋へよく遊びに行つた。其處の玉突屋に二人のゲーム取の娘がゐた。何時も黙りこくつた憂鬱な女だつた。偶に聞く言葉のアクセントが何うも出雲人らしいので聞いて見ると——俺と同郷の松江だとの事に妙に言ひ知れぬ懐しさを覺えた。

待遠しいものは故郷からの頼りである。思へば去年の夏はほんとうに樂しかつた。

都之介、巷二君等と毎晩の様に遊びに行つたあの頃が、コーヒを啜りながら天神から眺める尖道湖の夜景。

戀愛を遊戯化してゐる都之介、酔へば自己の戀愛体験を雄辯に語る巷二、哀しいかな一度も戀愛に經驗の無い俺、再び三人一所に語る日は何時？

難波の某レストランで、はいつも晝飯を食へる事に決めてゐた。晝までがどんなに待遠しかつたか。何時も、少女給は彼を愛嬌よく迎へるのだった。

いつだつたか、の洋服に附着した埃を、は拂除けて呉れた。そして二人の視線が合つた。だが、すぐに視線を反らすお互だつた。は、の親切を唯の親切と思へなくなつた。そして、わけもなく嬉しかつた。

白蛾ひそかに被さつて來た	滋賀蒼太
死んだつて空虚だなあひこりほち	同 同
農 村 風 景	
糸の値へ氣が遠くなる待望よ	鳥根 綠之助
米穀法の正體も知らず拍手する	同 同
ノーチツプそんな無粋な俺ぢやない	大阪 夕鐘
阿波の盆踊り	
鼻さきのほうかんむりで踊りに出	同 同
ほころびが縫へて淋しい獨り者	大阪 八歩
だあまつて事務を取るのも手段なる	同 同
火葬場はカナリヤが居て立つ煙	京都 司郎
死んで行く人に眼鏡を忘れてた	同 同
兄ちやんはネ肺病ですのこないでね	釜ヶ池 愚籠
◇	
生れしを淋しがる日の續くなり	釜ヶ池 靜太
今朝も又死んだ話へおもゆなる	同 同
寂しさはマーチャン浴衣ミぎけられ	同 同
食慾のない寂しさへ晴れてゐる	同 同
無造作に荷物を出され死んでゐる	同 同
乙女の死文はきちんミ整理され	同 同
梳いてやる姉うつかりミ涙ぐみ	大阪 勝二

前科者妻の行方をさがすがすなり

大阪晴夫

京都側から紫明氏清堂氏の披露があつて、二時に氣のゆるむを感じました。丁度今葉書が来ました。然も二枚もです。昨夜の句會の感想です。佛(氏)倉り讀んで居ます。句會後直ちに書いて下さつたので打ちました。打ちました。俄然私が打ちました真心の一打は、たしかに此の二人の心も打ちました。歡聲です、拍手です。ブラ

ボッ

笑はざるシヤツの白さへ陽は高しくつろいだ夕餉にも亦蚊のせめる身の爲であるさなかるさ俺の趣味金を費はすバーの飾りの贅澤さみすや針で歩をいぢめてる物思ひため息三鐘の音闇へもつれゆく光へそむく女さ歩き他所行きの帯めたさこ蟬がなきそこばくの花恩給の家の垣

鳥取同暢山
大阪同あや美
松江同淑子
大阪同黒天子
奉天同黒天子
奉天同黒天子

感想葉書的一端は本社の人々が見て頂いて決して無意義ではありません。一、「主張を貫徹さるゝ爲、選は全部川柳雜誌選とされたし。今回の「色」等の試み良いと思ひます。つまり「ゴシツブ」なんか氣に止めず大いに氣を長くして頑張つて下さい。」

一、「あの席題の選の出し方も變つて居て良かったです川柳雜誌の方が出来るだけ選をして下さつて「川柳雜誌」の句風をコピーして頂き度いのです。雑誌を讀ますと相待つて……讀み上げられた「色」の句の如き句を京都の川柳家——自分が、作る様になつたら……それは川柳の質の向上です」と。共に

松井大佐の遺骨を迎へて

シータンへ月が弾くのか胡弓の音人間の屑さいはれてよく儲けそのうちにわかる話へ軽く逃げ僕なんか捨てよまきもに生ききくれ夕立に走れそもないハイヒール兩手で抱いてく骨壺の軽さ揺れすぎるボートに丸うなつてる娘募集欄女ならざる悔で見ると助産婦の若さへ不安ふきさ言ふだけを言うた娘の氣もあはれ

大阪同掉二
大阪同掉二
愛媛同虹一
同同虹一
神戸同未來
同同未來
大阪同吐句坊
同同吐句坊
高知同鐵吉

川柳街の幹部、僕にとつては先輩の温かい激励です。縁雨サン代り合つて京都へ来て下さい。(九、一二)

馬・馬・馬

松盛琴人

ダーウキンの説では、「馬の初期は立つて

切りつめた生活へ嵩む香花料
 朝良に今朝も乳やが話込み
 子の日記毎日顔を洗つてる
 死んだ子のかしこかつたも親心
 丸髷に結つて假名文字ばかり書き
 月賦にて代理派遣のモーニンゲ
 流れ星疑惑を秘めし床につき
 受付の反身の巡查用がなし
 僕の子が籠持つ役か蟬の下
 幸福な男女ルンペンの目に追はれ
 信用を賣物にしていゝ暮し
 不圖雀が羨しくなる憂鬱さ
 戀の腫にふるればこまかに心散る
 白生地で儲けて問屋だまつてる
 七夕が下に見えてる高架線
 リットン卿悩ます夏の支那料理
 天井の節穴今日もふへてるす
 炎天にもう見得もない冷し飴
 黄昏に煙突男なき思ひ
 ほめられて孝女は母さ生別れ
 婦人科の門を訪ねる好い女

病床十日

金澤たし路
 大川青
 石川豊
 姫島方
 石川醉
 泉南鯉
 島根華
 愛媛南
 堺慈雨
 神戶竹
 松江冬
 島根與
 松本正
 京都啓
 神戶幸
 青島琴
 松山耕
 泉北錦
 長野季
 大阪永
 宮崎柳

らキヨロノ馬は當惑顔して、手の裏を返した様に柔順しくなり、其處に繋かれて何處を風が吹くかと云つた案配。此句は一寸した寗生句だが、言外に過去の案配を偲ばす素直に練れた句で、動と靜を巧みに取扱ひ配合溶和してある處に生命がある。場所は是非共渡舟場でなくてはならない。現代の馬の句では名句とするほどのものが甚だ少ない様である。一茶などの句を見ると。

新らしき蚊屋に寝る江戶の馬
 侍に蠅を追はせる御馬哉
 夕霧や馬の覺えし橋の穴
 逢坂や馴れし駒にいとまごひ
 草くれてさらばや駒の主
 しぐるや吠ふり馬の音

なご人情美の發露は古川柳にもおさく、劣らぬ境地を展開してゐる。では現代の句にてこれ等に對抗する句はと、「川柳雜誌」中より二三をすぐつて、筆を擱く事にする。幸ひ幾分の興趣をひくことが出来れば、筆者の喜びである。

除隊の日馬にも言葉かけて出る 一
 古里へはらゝて馬車はつき夢一佛
 見て通るみんなが馬に肩をもち泰平
 號令を馬の奴めが聞きわけける ひさし
 新兵の馬にも馴れた手紙が來正春
 正直へ馬嘶いて朝を出る 琴人
 散策に乗馬の夫人見つくされ町二
 スリッパのように芝居の馬の足夢々一佛
 新兵を震るひ落して草を食ひ阿々子
 水やれば目玉がうごく夏の馬鮎美
 やりきれぬいで裸馬水を飲み雷相



武玉川初篇研究 (五)

梅 本 秋 農 屋
森 子 東 省 二 魚

(81) 牡丹に馬鹿の狂ふ身代

省 二 牡丹に狂ふのは獅子であるが、物好きも亦狂て身代まで投出す。「御出入の李白をさがす牡丹かな（召波）位にして置きたい。牡丹は富貴草といふ。白氏文集に花開花落二十日一城人皆如狂なきある。

秋農屋 沈香亭に於ける玄宗帝も、又馬鹿者の一人である。

東 魚 馬鹿の狂ふ」につけては、さうも變である。「馬鹿の」で切つて、「狂ふ身代」をみるべきか。即ち牡丹に馬鹿な事——身代が狂つたさ、いふ風にさるべきかと思ふ。

(82) 十九が過てやりはなし也

省 二 十九は厄年、そして段々オールドミスとなる。仲人も遠ふのく。

秋農屋 やはりはなしは娘の方が、両親の方が少し曖昧である
東 魚 自分も自重し両親も直綿に包むで桐の箱にでも入れて置きたい程心配もしたが、厄がすぎてホットした、まゝ、萬事等閑になつたさいふ軽い意味だけではないか。

(83) 湯立をうめて通るむら雨

省 二 湯立は探湯の系統をひいたもの、巫女が神前の熱湯に笹を浸し身にそゞぎ、神託を得るのである。

秋農屋 面白光景を見かけて、うまく十四文字に纏めた句である。

東 魚 湯立の際に村雨が一過するこは、凄じい光景であるが、うめて通るは如何にも洒落氣がある。蕪村調でゆけば眞向から其凄じい光景を描いて満足する處、武玉川好みでは、うめて

通る處までゆかなければ承知出来ないものである。

(84) 順見のもたれ懸はまつの風

秋農屋 順見の役人が諸方を歩き廻り、肌には汗が流れ足も草臥れたまて、路傍の松樹にもたれ懸り、而て涼風に吹かれて休息する。こいふ句でもあらう。

東 魚 單に毛見の紫が松にもたれて休息したますだけでは、何んだか物足りない。

省 二 Ⅱが、そうこより解しようもなさそうだ。聊か難澁な表現だ。

(85) 買人を突付て見るいもり賣

省 二 Ⅱいもりではなく、ゐもり、井守。例の黒焼は二正が交接して居るのを指ゆる由、支那からの方法だ。「突付てみる」で、賣るまきのかけ引なき窺える。

秋農屋 Ⅱ「突付て見る」こいふこ、何か買人を教唆するやうに聽えるが、句意が不明である。

東 魚 Ⅱ効きめは忽ちですこ買人の心を煽る意味であらう。

(86) 四月八日ありかたい日は暮にけり

省 二 Ⅱお釋迦の御誕生——近代のサラリイマンはポーンナスの關係上クリスマス有難がる傾向だ。——「日永乞うれしき卯月八日哉」(葛三)。

秋農屋 私の幼年時代には、寺院へ甘茶を貰ひにゆくので、四月八日を楽しみにしたものである。また花御堂こいふものは今のよりも昔のが立派且美麗であつたと思ふ。

東 魚 Ⅱ「けり」止めの句法に内容にふさはしい、和やかさがある。

(87) 鳴らして捨る葉に残る月

省 二 Ⅱ「朝顔の葉で鐵砲を嫁はうち」よくやる事だ。嬉遊笑覽に、草の葉を鳴すここ「俳諧口寄草」元文元年、手を打にけりく、豆の葉に穴をあけては嬉しがり、「武玉川初篇」寛延三年、鳴して捨る葉に残る月。鳴したる葉には圓く孔あくなり彼の抱一は三絃趣味深く、鐵砲をいれた箱に孟東野三隨し一句をそへた。「手づみみや朝顔の葉を以て鳴る」。

秋農屋 Ⅱ前の詳説以外に、謂ふ可きこ無し。

東 魚 Ⅱ「残る月」であるから、朝の心持ちである。朝顔を言はずして鳴らした葉が考へられる。一讀すがくしい感がある

省 二 Ⅱ武玉川六篇「朝顔の葉なら花ならほんこ町」も參考にならうと思ふ。

(88) 黒木のうへの初雪を喰ふ

省 二 Ⅱ「初雪をみやけにはこぶ黒木賣」(致曲庵)。「九重の雪にはつかし黒木賣」(風葉)。黒こ白の取合せがほのめく。「日數ふる雪けにまさる炭籠の煙もさびし大原の里」で生木をむして黒くなし薪に用ゆ。

秋農屋 Ⅱ「喰ふ」の二字は、技巧を弄し過るやうである。

東 魚 Ⅱ黒こ白こいへばさうだが、きはだつて取合を見せつけた處はない。軽い大原女的情景を受取ればよろしい。

(89) 飛彈の工もやはり切筆

省 二 飛驒は山國なれば深林にこみ、人々木材を取扱ふに馴れて居る。諸國に出ては普請を受つたから、神社佛閣の遺作も多く、飛驒の匠ミ號して著名である。年々一定員を京の木工寮にも御採用になつた。―(六樹園飯盛に飛驒匠物語六冊がある、今昔物語にも一項がある)

秋農屋 二 「切筆」は禿筆のここであらうが、飛驒の匠ミの關係が判らぬ。

東 魚 二 キレ筆でなくキリ筆で、所謂墨さしを意味するのではあるまいか。飛驒の工だミで特別の筆を用ひた譯ではなく、例の竹ペラを使つたのささいふ、ユーモラスな氣分ではないか
省 二 竹ペラであるに違ひない、がキレ筆で禿筆の謂をも含む。

(90) たばこ入家内へ隠す松の内

省 二 何にか風習があつたのであらうが、寡聞である。

秋農屋 二 昔は火の用心を大切にしたり故、松の内は煙禁する習慣でも有つた歟。文献の徴す可きものは無いやうである。

東 魚 二 正月外出に立派な煙草入をもつてゐるのではないかあんな煙草入を拵る金があるなら、暮に工面をさせる事もなからうに己家の者に言はれたくないので、隠しもつてゐるのではないか。甚だ駄勞解である。

(91) 柴の戸を大根で叩く霜の花

省 二 田園生活の一點景。

秋農屋 二 霜の花の「花」が耳障りである。

東 魚 二 薄雪程ふつた霜のまゝの大根を、戸に軽く叩きもつて這入る。霜がハラ／＼落ちる場面ではないか。そこを花ミ興じたのであらう。

(92) 足の淋しき下馬の六尺

省 二 下馬下乗は乗物禁止。陸尺は駕籠昇。「陸尺はこん／＼ちきの姿なり」。腰から下は不釣合であつた。

秋農屋 二 諸侯の駕籠を昇く陸尺は、紺看板(法被一枚に梵天の三尺帯を締め、空臈であつたらしいから、君公の下城を下馬所に待つ陸尺達の足は、甚淋しく看えたであらう。丹波龜山侯の近侍を勤めた某老人の話に、雨雪の日に君公の登城の御供をなし、袴の股立を取つて空臈を出して、下馬所に待つて居る間が、最苦痛であつた云ふ。昔の下馬所の光景は、堀秀成著「下馬のおみなひ」に詳記してゐる。

東 魚 二 何ミなく面白い句だ。立派な體格の男のキリツミした紺看板の姿、それに對照してヌツミ出した空ラ腔、脚肝も何もない脚を「淋しき」ミ興じたのであらう。物足りぬ位の意にみてよろしからうか。

(93) 御端下までは行ぬからかさ

秋農屋 二 御殿女中の花見か御代參なきに、遽雨に逢つて傘を求めたけれども、其數が甚少いので、上の方の分ばかりで端下女までは行渡らぬさいふのである。

東 魚 二 従ておはした達の手拭を被つたり裾をからけるやうな有様も連想せられる。

省 二「お端女は宮重二本ひんまくり」であらう、阿々。

(94) 呑喰も四十と言ふか先へ立

省 二「私は初老を痛感した、鉢の調子が全く變つてしまつた。」五十を越すに殖る毒斷(武十四)。四十がたりこの諺もある。

秋農屋 四十不惑。飲食物の外に猶一つあらう。

東 魚 喰ふ方はわれ乍らめつきり減じたやうだが、さうも飲む方は中々——笑止千萬である。

(95) 雪ころはしへ登垣間見

省 二「今は雪ころがし雪ころばし猶はぶきては雪こかしも云ひ、古き俳諧は雪ころはかし云へり」で、犬子集「すへりては人も雪ころはし哉」——登る垣間見は、巧な用ひ方だ

秋農屋 斯る光景は現代にもみられる。

東 魚 垣間見にも、おごけ氣分がある。

(96) うき世はあしに着なす上下

省 二「あしはアヂならむ。意味ありげ、趣きか。

秋農屋 あぢに相違ない。「あぢな事をいふ。「あぢをやる」なごのあぢである。

東 魚 上下で勤める處はしかつめらしいが、一度ぬけば中々酔いも甘いもかみ分けたさいふ人物。

(97) 鴛の除け物になる雲のみね

省 二「鴛鴦涼しは夏季に用ふ。夏雲奇峯多き雲の峰の雄大に對しては、暫く鴛は話題外だ。

秋農屋 大きな湖水か入江なごの光景。

東 魚 「除け物になる」が矢張り面白い。鴛を閉却した處に雲の峰の雄大な風景が描かれてゐる。

(98) 衣紋坂出家の提る土大根

省 二「色即是空を悟つた出家なればこそ。

秋農屋 出家が土大根を提けて、衣紋坂を通るさいふのは、少し作りすぎた句である。

東 魚 壇家の妓樓へ暮の讀經にでもくる僧なのであらうか

(99) 湯舟の煙黒い六月

省 二「夕立雲に湯舟(浴槽)の煙が上るのであらう。——(それ)も船に風呂を設備した方であらう歟。骨董集に云、日本永代藏四の巻江戸の事を云ふ條に、或人舟付の自由さする行水船云物を仕始めて利を得たる事を記せり。さ尙ほ義理櫻一之巻を引用して詳述してある。風呂船は明治代迄もあつた云ふ。私は遂に見損した)

秋農屋 日本永代藏卷之四を調べたが、行水船の事は無いやうだ、私の看落しである歟。江戸の大川岸に繋ぐ船の人は、上陸して市中の錢湯に這入る故、湯船は無くても事が足るのであらう。私はこれを看た事がない。

東 魚 湯舟を浴槽ださるご、煙は湯氣らしく思はれる。

するご冬季なら著しく白く湯氣をあけるに對して暑い時だから湯氣が目立たぬ。それを「黒い」さいふ感で現はしたのではあるまいか。

省 二 卷之四は誤字で卷六の第二、「見立て養子が利發」の項に、「かくの如く萬事に氣をつけ後には思ひの外なる智慧を出して舟つきの自由させる行水舟をこしらへ」こまげある。

(100) 付さしを渡すと直にあちら向

省 二 この付差は酒か煙草か。柳亭筆記に「付さしこいふ事今は酒にのみいへ共、昔は煙草の付さしこいふ事あり、鷹筑波渠、前句戀こそ胸の煙こはなれ、附句忍べるか呑し煙艸の付さしに一滴」云々。古川柳に「付差して禁酒を破るはしたなさ」西鶴の天下馬卷二、残るものにて金の鍋の條に、「後には付さしさまへ我を覺えず酔ひ出でければ」尚ほ武玉川五篇に「付さしに口を付るこあちら向」後撰夷曲集には「付さしは藥酒こそ申へき戀の病のかろくなりつゝ」(知義)。

秋農屋 長唄の吉原雀に、「つけさしは濃茶かへ」こいふ文句があるから、酒煙草の外に茶の附さしも有るのである。

東 魚 赤子の頬をつけさしにする「なごこ洒落れていつた句もある。付差のこは酒の呑廻しから出た言葉たらうこ思ふ

(101) 夜の雪駄のひよく木からし

秋農屋 木枯の吹きすすむ初冬の夜半に、街路を通行する人の、雪駄の音が冴て響くこいふのである。

東 魚 木枯のいつそ寒いは土手をふき(夜叉郎)を思出す

省 二 私の幼時は好むで雪駄をはいた。江戸時代ま當初は高貴なものであつたのが、流行につれ丁兒用が製られ、一般的になつた。

(102) 秋風に山伏のうつ火かこほれ
秋農屋 逆の峰入に、山伏が燧火を打つので、秋の山路の光景である。

東 魚 山路に憩ふ山伏が、煙艸火か何かうつ、其火がこほれる。山伏なる特異人物だけに、何か凄しい氣がされる云ふ秋風裡の一景を捉へた面白い句だ。勿論逆の峰入の場合こも解せられるが、そこ迄考へなくこも此句は面白い。

省 二 秋の山伏から逆の峰聯想が生じたもの、今峰入りこせば千日別屋に籠つてからの順路を想ふて、火がこほれに深刻さは出る。

(103) 薬にも毒にもならず年男

秋農屋 世間には沈香も焚かず、屁も放らずこいふ男の有るものだが、これは泡儼の豆を撒く年男なごに、最適任者である

東 魚 好人物實直な人物が想像される。小生の伯父の家では三十年來勤めてゐる人が年男をやる例であつた。父が「年々に若返りけり年男」こ即吟してやつたら大變喜んだのをそばから私が「年々愚に返りけり——」こやつて、大いにしよけさした事があつた。此句で其事を思出して失笑した。餘談で恐縮する。

省 二 鶉衣には「年々の節分には、ひよわき親仁も年男も名乗りて二句の文を唱へ」なごある。

(104) 情しらすの筑波見て居

秋農屋 筑波の合に、男女が多く集り、酒をのみ歌を諳つ

てゐる中に、戀情を知らぬ者が、只漫然と山ばかり見てゐるこゝの歎。

東 魚 〓 男女二躰の峰、戀ぞつもりて淵なるみな川のあ
る筑波、かく直に戀の連想のあるべき筑波の山を、情知らずの
ものが眺めてゐる。何の興趣もなからうに——云はば猫に小判
と云ふやうな軽い諧謔味だけを詠むだものかと思ふ。

省 二 結局前句が欲しい、確心がつかぬ。常陸風土記に出
てゐるカカビは思はぬではなかつたが……

(105) ひつしやりと被つふれる山風

秋農屋 〓 全然不明。

東 魚 〓 美しい人の山詣、折から山風に被衣かひしやけだ美
しいものに對する一寸アイロニカルな光景を描いたものであら
う。

省 二 〓 然らむ、「つぶれる」は嵐からの當然の表現ではある
が、一層身によく纏ふ謂をも含む。京城の北漢山嵐に逢ふ、鮮
女の被姿に適合する。

(103) 三人寄れば毒な多くれ

省 二 〓 三人よるさろくな事なし(武十五)。「三人寄て三步
減る智恵(武十八)。三人は不思議な心境を生む。「五人さなれ
ばむつかしい智恵(武十六)。「六人寄るさ智恵の罔兩(武十
七)。

秋農屋 〓 三人寄つて、三步の花魁買ひなるこゝ、遂には身の毒

こもなる。

東 魚 〓 洒落本でも大抵三人の友達が登場してゐる。現今の
言葉でいへば、「悪友が三人よるさ事が出来」でも云ふ所であ
る。

(107) 合點て居てもあふない暖メ鳥

省 二 〓 鷹は冬の夜、小鳥なきを捕へて足を暖め、旦にはこ
れをゆるす。「ぬくめ鳥共に身ふるふ旭かな(關更)。小鳥の飛
び去つた方では、決して物を撃つともいふ。仁義を知れるもの
とされて居る。が夫れでも雫なきの性質から、何んさなう氣が
かりになつてなるまい——「爪たてぬ心もあはれ暖鳥(蓼太)

秋の屋 〓 放たれる迄は、戦々兢兢とこしてゐるだらう。

東 魚 〓 諧謔味がある。助かる事は助かると思つてゐても、
全くいゝ氣持はしなからう。「合點て居ても」は巧い修辭だ。

牧野虎雄氏個展

路郎主幹編輯の「雪」時代
の同人であつた帝展審査員牧
野虎雄氏が大阪における第一
回の個展で二十點ほどの出品
があり、最大十五號、あとは
それ以下の小品であるが、寡
作の氏としてこれだけ集つて
ゐるのは珍らしいことだとし
なければならぬ。中で「葡

萄」といふ風景は構圖がよく
氏一流の技法を示した佳作で
ある。「白樺」は色調が非常
によく、花卉では最上で「け
し」は美しさを代表してゐる
その他富士山を描いたものや
「温室」などあり、見ごたへ
のある個展である。

九月二十六日より三十日まで、朝日ビル五階、美術新
論社画廊。

光耀抄

葭乃選

岩かけがこわく自然の子になれず
大 阪 公 子

歸 村

迎へても呉れない自家が嬉しくて
朝顔はいつはりなしに咲いてゐる
陽やけして歸れぬ母は喜ばず

大 阪 茂 代

その水着脱がせて見たい畫家の慾
冷水が鬚に沁むも秋の朝
この月は祭日がないカレンダー

堺 道 子

カンナカンナ九月が来たよ左様なら
十八の誇りは袴の色にみせ

大 阪 伊勢子

なまいきに見られてゐるも無口の娘
法名もやつと覚えて一七日

大 阪 千榮子

客去んでからも鈴虫鳴き止まず
抱きしめる手が餘りにも蒼白き

神 戸 茂もよ

罨すし毒や毒やと親がたべ
糸瓜一つさぞやおまへも淋しかる

大 阪 房 子

更生の日早かれと惜しまるゝ
松山が三點入れし手の響き
捨てゝ行くものはバットの空ばかり
アパートの窓から洩れるマンドリン
入學へ行衛が知れぬ種痘證
未だ三つ兄も吸うてる母乳型
子等も皆二十世紀の方を取り
素麵が冷えたと晝寝起される

大 阪 壽枝女

白靴のすわりつこして似合ふ君
虫干よ紙魚は忙しふ逃げ廻り
健康になりたし日焼けなんのその
鳥の子は鳥の子のまゝしやほん減り
また來んこ月草咲く頭を去ぬ

魚 崎 吟 女

殺生許りして坊やの夏休み
取つて來たギスが鳴いてる子のねい

うす物の襟かき合せ秋だわね
あきつ飛ぶ今行過ぎた急行車

大 阪 貴志子

名月に松もダンスの影を投げ
郷里へ墓參して

村人の情け粉の山豆の山

半 襟 (三巻)

半ゑりに母がなさけの賃仕事
一かけの襟に眠れぬ日もありし

大 阪 機見女

七・一〇光耀川柳會創立句會の日
感激の心もおなじさくらんぼ
角がこれすぎたなやみの小石なる

室戸岬にて



柳

の

絮

長野吉高

(一八)

扉を開けるにすぐに臺所になつてゐる。其處を五、六足で通り抜けるにその部屋が蛙面君の書齋であり、客間であり、また寢室でもある。部屋の中央の圓テーブルに、一頃のイタリーの藝術家達のやうに頭髮を長くのばすルネッサンス型にした蛙面君が、薄汚れたワイシャツをまくつて肘を突き、バラのパイプから濼々煙を立て、顔を埋めてゐる。

三文君は、バネが緩み、天鵞絨の剥けた椅子をギチ／＼こゆりながら

「——で、つまりアバウトから立退き命令を喰つたんだ。氣の毒だと思つたから、金の工面をして持つて行き、これを使つてくれと言つたら彼女から叱られたんだよ。其の事を皆んなの奴が色々と言ふのだらう。僕には、第三者からみるやうな不純な氣持は毛頭ない。これは君だけは信じてくれるだらうね。人の口はうるさいナ。」

蛙面君はバツミ煙を吹き上げて

「ミミ子さんは、噂によるミ繪の方を止めたさうだね。」

「もう描かないだらう。たぶん。」

「ふうん。」

蛙面君は煙幕の中で潰れたやうな聲を出す。テーブルの上の水色表紙の少女雑誌を手に取り、左の指を泳がしてペラ／＼繰りながら三文君

「ミミ子クンが怪我した一件から以來、僕はあつちこつちでかなり毒づかれた。自業自得で誰を恨みやうもないが——。」

「あ、この雑誌には僕が少女小説を書いてやつてるんだがね見てるか？」

「あいつだけが、つまらなさそうに讀んでるよ」

蛙面君が顔をしゃくつた部屋の隅の、其處の古ぼけた寢臺の上では琅琅子ちゃんがつた／＼になつて、これはまたひびく

寢ざうが悪い。空氣枕から、男の子のやうに短かく刈込んだ頭をすり落し、狐色のしかも所々に穴の開いた毛布を蹴飛ばしてゐる。さうやら蛙面君の古ワイシャツでも仕立直して寝巻にしてゐるやうだが、柔かそうな腿から下はまる出しだ。グンミ脚をのばし、シートに顔を叩きつけ、今にも寢臺から降り落ちそうになつてゐる。

瓊瓊子ちやんは、やつ三十四になる。兄貴の蛙面君の入れてくれた青山の女學校に通つてゐるが、無精な兄貴が何一つ縦のものを極にもせぬので、何もかも一人でやつてのける蛙面君は、研究劇團の木星座の脚本部にゐるが、仕事の都合でさうかするさ夜の十一時過ぎ頃でないさ歸らない事が時々ある。瓊瓊子ちやんは、たつた一人でこけ臭い飯を食ひ、おこなくも勉強し、眠くなるさ寢臺にもぐり込む。蛙面君は歸つて来るさ、この子を鞠のやうに一つ二つ轉がして置いて、その横に一緒に寝る。これが寒い冬の夜なご、冷えた体でまるで戀女房かなんぞのやうに抱きすくめて寝るので、瓊瓊子ちやんは苦しがつて蛙面君をお尻で突き飛ばすやら、足で脇腹を蹴飛ばすやら、いやもう夢中で荒れ廻るさがある。

「仕事の方はさうだい。うまくやれるか?」

ボンミ雑誌を投げた三文君は、左の耳を小指でほじくる。蛙面君は、相變らず肘を突いたまゝで

「さうかく僕等の方は、興業劇側ミ違つて經濟的に餘程苦しい。」

「君んミこは、翻譯劇ばかりやつてゐるね。」

「さうだよ。フランス劇を出發してゐる。たゞの芝居ミ藝術である芝居ミを區別してやつてゐるがね。一体、從來の日本の新劇さいふものは、餘りにドイツミロシアの劇に傾き過ぎてる。で我々の手に依つて譯出されたフランス劇を我々の手によつて日本の脚光にさらす、それだけだ。」

「ぢや、フランス劇しかやらないんだね。」

「さうではない。僕等が期する新演劇に適合した脚本なら、必ずしもフランス劇に限つてはゐない。究極の目的は、自國人の手になつた脚本を、自國人によつて上演したいのサ。會つて××小劇場が翻譯劇に終始して、攻撃を受けたさがあるのは君も知つてゐるだらう。うっかりするさ、僕等もその前轍を踏むからね。最近では同邦のいゝ脚本の出現を待つてゐるんだ。だが無いサ。脚本難だよ。有名な作であらうさあるまいさ、其んな事は問題でない。先づ劇團としての好みを第一にしてゐるんだ。」

「脚本ミ言へば、ほら例の貞子さいふ人の書いたものはさうなつたんだい?」

蛙面君は急に緊張した面持で

「貞子さんの脚本か——實はその件に就て、先日から演出部ミ脚本部ミで色々論議があるんぢね。何しろ先輩の八福さんが仲に入つてゐる關係もあるし、其れに劇團としては今迄に随分陰に陽に八福さんの世話になつてゐる。で、義理にも

首を横にふられない立場にあるんだよ。だが、八福さんの言ふことはよく解つてゐるんだ。「自分は立派な脚本だと思ふから推薦するので決つて單なる情實がらみてこの問題を提起したのでないから劇團として都合が悪いなら遠慮なく言つてくれ」ミ、ね。ミところが、ま正直に演出部の方から早速苦情が出たんだ。つまり、上演しないと言ふんだよ。」

「何故だい？」

「何故つて、こりや極めてデリケートな問題だと思ふがね。

演出部の連中が、表面上このことに反對するのは第一、脚本が劇團にミつてこなしきれないこと、第二は作者問題、ミにある。だが、僕等の脚本部の方では第一の問題はミもかく、第二の問題に至つては斷然不都合だ、ミまあ激昂した譯でね。」

「作者問題つて？、貞子さんが氣に喰はぬミでもいふ意味かい。」

「ま、露骨に言へばさういふことになる。要するに、無名の然もっら若い女の書いたものなんぞを、單に好奇主義で上演するところは、今の劇團としては餘り冒險過ぎる、ミ言ふんだよ。」

三文君は吐き出すやうに

「笑はかしやがらア。」

蛙面君は長髪を搔き上げながら

「これでは脚本部が憤慨するのは當前だらう。僕は作家の貞

子さんといふ人は知らないし、で別に肩を持つミいふ譯でもないが、今度の件に就ては大變に氣の毒に思つてゐる。たゞに貞子さんばかりの問題ではない。これは現在の日本劇界に投げ與へられてゐる重大問題だ。傳統的な演劇も悪くはないが然し新時代に應ずるミ苟も新劇團の看板を塗つてゐる以上、問題の解決は先づ新劇團で勇敢にやつてのける必要がある。

いや、その義務ミ責任ミがあるミ思ふ。それにこんな頑迷なことを言ふんだからね。演出部は明かに劇團としての主義を冒瀆しやうとするんだ。有名な作であらうミあるまいミ、劇團の好みを先にするミいふ事ミ矛盾してゐる。演出部のいふ脚本がこなしきれないミは、僕に言はすればこれは一種のつげたりで、上演反對の主因は作者問題にあるミ思ふよ。卑怯ぢやないか。八福さんが言ふ通り、貞子さんの書いたものは脚本としてはなかく立派なものだ。事實、貞子さんは非常に頭のいゝ人ださうだが、餘程の力量がないミ若くてあれだけのものは書けない。ケチな感情の爲めに、藝術家の任務を怠らうミしてゐる演出部は不都合だ。」

「ちえッ！解らねえ奴等だナ。そんなポロ劇團なんか後足で砂でふひつかけておん出るよ」

蛙面君は苦笑して

「ミ、いつて出りや僕ばかりでなく琅琊子までひほしにならア。出るに出不れぬ。ミにかく八福さんが仲に這入つてゐるの、演出部の方が折れて來て案外に早く圓滿な運びになるか

も知れない。何んでも話によるご、貞子さんは今度の脚本を書き途中で、ペンを握つたまま幾度も卒倒したさうだよ。」

「ほう。」

「三文君は溜息をつく。寢臺の上の琅琅子ちゃんも寢返りを打つたさ見え蝦のやうに胸を曲けてゐる。三文君は暫くそれを見てゐるが急に投出すやうな口調で

「希望を持つて新しく世に出やうとする者もあるし、僕等のやうに倦怠期に入つて原稿書くのが五月蠅くなつた者もあるし、これが人生かな。今更田舎にすつこんで中學校や女學校の教師くんだりに落ちぶれるのも情無いしね。」

蛙面君は煙を水のやうに吹き流して

「親兄弟を泣かして高い教育を受けて、それで人一倍の苦勞をなめ、貧乏して好きな女房も貰へないで——これが今日の藝術家だらうな。」

「親の遺産なんか貰やがつて、ブルジョアづらする奴は藝術では水も飲めないだらうさぬかす。」

「あ、さうさ。君、何處かの古道具屋に水甕があつたら知らしてくれ給へ。」

「水甕？」

「三文君は變な顔する。」

「琅琅がね。ぶち破つたんだよ。あいつは其の破片で水を受けて洗面器がはりにしてる。」

空氣の流迫の悪い臺所で、セラー服の上からエプロンをか

け、眼をこすりこすり玉葱を切つたり、折角に煮た鍋の豆をひつくり返したり、飯を黒くけにさしたり——いやもう、琅琅子ちゃんの炊事だけはワイワレの描いた漫畫にだつてない。塵芥箱の傍に芽を生やした豆に、馬が小便をひつかけてゐるやうなドイッの裏長屋の濕つっぽい生活は描いてもこのワイワレのユウモアを以てしては、琅琅子ちゃんのいたいけな臺所仕事は餘りに可憐である。蛙面君が、まだ寢臺の上でのされたやうに長くなつて夢を見てゐる朝、この子はニュームの辨當箱に冷や飯と海苔をつめ込み、水っぽい味噌汁で食事をして圓テーパーの上に兄貴の爲めに缺けた茶碗と皿を並べて置く。そして、埃で白くなつた靴を、臺所の折れ釘にひつかけたエプロンでちよいと拭いていさも朗かな顔して學校に行く

「さつきの相談に乗るか、さうだい。」

三文君は、これはまた馬鹿真面目な顔をして不意に話のよりを戻す。蛙面君は妙事もしない。話さういふのは、喫煙組合を作らうさういふのだ。その聲明なるものによるご、煙草はすべからくのむべしである、だが我々貧乏人は單なる愛煙家であつてはならぬ、喫煙の爲めには合法的な運動をする必要がある、喫煙イデオロギーのもごに愛煙階級の同志は勇敢に反動禁煙黨に戦を宣言して、これを踏み潰し叩き散らす、萬國の煙草のみごも團結せよ——さまあいふやうなもので、この組合には蝴蝶黨、バット黨、朝日黨、敷島黨、等、等の支部を置く。そのスローガンは「尻から煙を出せ」だ。結盟式當日

は、上野公園に集合して演舌をやり、それから示威運動の爲め組員は各自黨の煙草を吹かし、街頭にくり出す。

「組員からは、毎月煙草の空箱を集める。でそいつを屑屋に賣るのさ。中には泡を喰つて、一本や二本残つてるまゝの箱を提出する者があるかも知れない。それは幹事の所得だよ箱を賣つた収益は積立て、それで喫煙ホールを建てることにするんだ。僕は蝴蝶標の幹事になりたいね。さうだい、名案だらう。」

三文君は、煙のやうな頼りない事を酒々こ言つてのける。

蛙面君は、返事も馬鹿らしいこいつた顔で

「呆れたダラ幹だナ。暇になるミ用が無いもんだから、色々このことを考へやがる。そんなことを——。」

ミ何か言ひかけ、耳を澄まして

「雨になつたね。」

飛燕往來

▼前田雀郎氏（東京） 拜啓其後は御無沙汰お許し下さい。昨夜「川柳雜誌」有難く拜受。巻頭の「柳人へ」の御高説共鳴いたしました。私もきやり九月號に同じやうな氣持を書いて居ります。一層柳界向上の爲め御協力願上度く敬意を表します。奥様によろしく。十月頃大阪へ行き度いと思つてゐます。東京へは出られませんか。（路郎宛）

さつきから、後の窓がバラ／＼ミ鳴つてゐる。廣い往來から細い小路へ入つた目黒の此處らは、夜になるミ人通りが無いドタン！

急に大きな音がしたので、吃驚してふり向いた三文君は「ヤツ！」

ミ、叫んだまゝ眼をバチつかす。琅琅子ちゃん、寢臺から床の上に這り落ち、二つ三つころがつたミころだ。琅琅子ちゃんはずぐにムクリミ起き上つたが、まだ寢ほけてゐるミ見え、なんでなくミ短い變てこな寢卷が、お腹の方までまくれあがつてゐる其のまゝ、床の上へべたりミ座つて、兩手でモヅ／＼坊主のやうな頭を搔き廻してゐる。蛙面君はそのミ立つて行つたミ思ふミ、琅琅子ちゃんを輕々ミ兩腕にすくつて、寢臺の上にポイミ置き

「なんて妙な藝當をやらかすんだ。」

（つゞく）

▼岩崎柳路君（東京） 前略一登美坊君のハル

ピン便り面白く毎號拜見して居ります。私のハルピン時代を思はせられる事大いにあります、小生は當分表記に滞在しますが、今一寸忙しいので當地の川柳家とは未だお會ひ出来ません。寸暇を得て連樂、木耳兩氏とお會ひしてお便りいたします。何卒路郎師始めひるし、かほる、素人様へよろしく、其後お体お丈夫の由何よりと存じます。精々御自愛の上御努力下さい。祈つて居ります。先は取急ぎ右御願まで、九月號去る三日入手候。草

々九月四日夜。（路郎宛）

▼伊藤愚陀君（大阪） 路郎師。御無沙汰致しました過日の句會には、失禮してしまいました。三十日からマザーが、高い熱を出して寢込でしまつたので往生しました。がもういゝ方です。一昨日から學校商賣を始めてゐます。汽車にのつて、電車にのつて、バスにのつて居睡つてゐます。今月も句が遅れましたがよろしく御願ひ致します。近頃妙に句が出来ません。句が後がえりをして笑つてゐる様です。十七字の愧れと云つた様な暗示的な文章が

讀みたい氣がします。手あたり次第に本を讀んでゐます。それから御手數恐れ入りますが、過日の拙稿藝術と自明なるもの。今度のせられない様だつたら御返送下さる様にお取り配ひ下さい。學校の方に原稿を頼まれて居たのが母の病氣のため書けなかつたので、それで間に合せようかとも思つてゐます。川柳、川柳、川柳が辨らなくなりかけて来て居ます。眼が霞んでいい句が辨らなくなつて居るのかも知れません。「秋さらり銀の襖のものおもしろい」の句が懐しい氣候になりつゝ、あります。○○氏？が映畫と川柳を書いてゐます。彼氏、川柳を見てゐないのか、映畫を見てゐないのか、それとも二つ乍ら見てゐないのか。斯界に嗜眠性腦膜炎が襲いつゝある様に感じられます。先生一つ文章を書いて下さい。何か手紙でも——お暇ならば——下さい。眠つて了ひそうです。では原稿の方と句をよろしく御願ひ致します。葎乃さんへも是非よろしくお傳へ下さい。つまらない事を書き並べました。(露野郎)

▼長野吉高氏(翁) 紙面は都合つけば別稿「柿の皮容職願上候。本稿「柳の絮の方多少豫定枚数を削り置き候(普通十五、六枚の内外的豫定を本稿は十三枚止め)所詮は柿の皮喰はれもせれば御捨て御自由候。編輯氏の方へ可然諒解あるやう御話願上候。先月の稿は遅延の爲め御心配をかけ何んとも、恐縮で今度は早速と御送申上候(露野郎)

▼食瀧南北氏(大) 毎々川柳雜誌御惠贈を忝けのうし恐縮に候、爾來平に御遠慮申上候

川柳をかつてにやるだけで今は斯道に何の關係も無之原稿なども、さしつかへ居る折柄大いに心苦しく特に——御寄贈を御遠慮申上ぐる。チャシン御くみわけ下さされてよろしく御中止願ひ入候(社)

▼道田葉平君(大) 所要ありて彦根に至り歸途草津姥ヶ餅を味ふ。街道筋に雨つめたく靴底より秋しみ至る。エハカギに判を需むれば若きモダシな細君 四百年前の姥より傳りしならん文箱の埃りを拂ひ墨する、いぶかしと見れば墨は印判に用ふる爲、此判竹の皮の上にてこすり〜押せるもの——以下略(山)

▼小林不浪人氏(翁) いつも御無沙汰勝ちてほんとに失禮してゐます。「川柳雜誌」への御努力常に敬服してゐます。貧弱な「みちのく」も御かげさまで第百五十三號を出しました。就いては次號で發表の課題吟の選を御願ひいたしたのであります。御聞き濟みの上、課題一、二題 御示し下さるや、くれぐれも御願ひいたします。小子はいいつも川柳のことに追はれ勝ちであります。先達も十五日にH.K.から川柳漫談「月も歩く」を放送、續いて十八日 函館茶社川柳社一周年記念會にお出席のため海峡を越え、二十三日柳翁忌にお話をするため黒石へ行って参りました。精力の續く限り川柳のために盡す、心算であります。時節柄實叢の御健康を祈つて居ります御願ひかた〜。九月二十五日(露野郎)

▼蛭子省二氏(朝) 青々氏の古川柳抄記、流石俳壇一方の頭目丈けに簡潔なる註に滿

足するものがあります。最初から拜見したのではないから抄録の方針が不明、要するに手當り次第、柳句を粗上にされたのであらうと思ふ「倭鳥」誌上俳人に古川柳の價値を教へられるものなりとせば、狂泉紛々たるもの、交るが遺憾であります。佳句或に参考となるもの、のみを御採録願ひたい思ひます。川柳家は柳柳(殊に二十四へん迄)を虎の巻と致しますが、これは餘程吟味を要する事、川柳翁の選中にも狂泉あるものは、多々採られて居る。狂句形式は川柳と名づくるもの、發生よりは事實古いのだから古俳句にだつて夥しいのであります。川柳家たる私共の義務としては柳柳全部の註釋を施して、置く丈けの努力は拂つてみればならず、其間詩非詩の區別も明瞭にして置き度いのであります。此仕事を川柳家が平素心掛けてやります。例へば俳人側の川柳註解は、恰も青々氏のおやり、そのに手當次第、柳句を採るといふ事になり、そこは俳人が、俳句に於ける程の真劍味は希ふわけにゆかぬのは無理からぬ事です。故に古川柳の研究は二派に別れ、一つは柳柳全部に目をつける、他はその中より採釋する——而て前者は、どうしても、學者的趣味的傾向を帯びてくるのは當然でありますから、多くの川柳家はその事を望むわけにはゆかぬ。川柳雜誌社人でも此二派に屬して、専攻さるゝ様に組織的の御協議も願ひ致し度い願望を有します。——以下略——(山)

實眞と嘘

一 前號近作柳樞より

松丘二町

うりもの、悲しい汗が滴する
瘦せてゆく我に近き寄ものもなし 同 雅 幽
笑へども、腮が、動かぬ生活苦 同
八月の草花活けて戀はなし 同

既に早くから山雨樓氏が激賞してゐる
この作者の佳さが、私にも解つてきた。
解つてきたこいふよりも、雅幽氏の作品
の力が、私をして解らせてきたと云つた
方が正しいかも知れぬ。謂はゞ私の心の
耳が作品の底を流れる作者の宿命の音を
聴くことが出来たとも云へる。眞實を歌
へ。こは古來先輩詩人達の口癖に唱へ來
つたお題目であつた。「眞實を歌へ」一
見埒もなく明瞭で單純なこの言葉は、こ
様々な抽象の可能を實踐の困難を孕ん
で、その解決に絶望的に精巧な鍵を必要
とするものはない。一體我々は知らぬこ
こが此の世で一番難かしいと思つてゐる

が、その實一番よく知つてゐるこが一番
難かしいものだ。こいふ事情には氣がつか
ないでゐる。知らぬここについては、
その知らぬこいふこが、みんなにその
身にこつて不幸であらうと、人々は一向
平氣で酒々こしてゐる。そしてこの世に
生きて何故自分は川柳作家であるのか、
何故川柳を作らずにはゐられないのか、
こいふ云はゞ川柳作家としての宿命理論
などは凡そ考へても見ないで、子供が吹
き出すやうな他愛もない獨りよがりの理
屈を並べて、本人頗るいゝ氣持になつて
ゐる。可憐極まる風景である。だが道草
は喰ふまい。

さて、我々にこつて、複雑な理論を語
るよりも、簡單な眞理を語る方が遙かに
難かしいので「眞實を歌へ。藝術はそれ
が純粹であればあるほど貴いのだ」と云
はれて、成る程！こ一應納得して引退る
が、さて眞實とは一体何か？誰も明瞭に
は語れないのである。「眞實を歌へ」は
つまり「裸の言葉を探すここである」と
云はれても「裸の言葉なるものが一層わか
りにくい。問題はここの單純明白な眞理

をめぐつて、困亂するばかりである。曩
に云つた「宿命の音」なまゝいふ言葉も
甚だ抽象的に見える言葉であるが、例へ
ばかう考へる「精神は文体を持たぬ」こ
いつたヴァレリーの言葉は、逆説的であ
らうとも、我々の頭腦は、色々な眞理を
理解し、それを觀念として棲息させるこ
こは出来るが、悉くそれを所有するここ
は出来ぬ。こいふ意味は、例へば私にこ
つて私は技術者であり、川柳作家である
ここは可能だが、私が私以外のものにな
るここは決して出来ない。こいふここで
我々の全身を血球と共に循る眞實は、唯
一つあるのみである。「宿命の音」こは
即ちこの血潮と共に循る一眞實の語る聲
なき聲である。作家の性格と云ひ、獨創
性といひ、亦之と異つたものを指すので
はないのである。では結局「眞實を歌へ」
こは「個性を生かせ」といふここになる
のか。「裸の言葉」こは「宿命の音」が
奏でる聲なき聲を意味するののか。

言葉の絶対性——人々の口に語られる
言葉のうちで、科學者が純粹な水と呼ぶ
意味での純粹な言葉なんてものは、此の
世に一つもありはせぬ。誠に言葉は猥雑

である。猥雑であるから陰翳を持つ。陰翳を持つから豊富である。我々はこの豊富性の裡を彷徨して、遂にその底を流れる作者の宿命の主調低音をきく。少くともそれが聴き得られないやうな作品から何等の興味も意欲も起らない。只十七音字の記號を眺めて、穢された言葉に對する怒りを感じるのみである。

ぼくはびやうにんぼくの

のぞみもかはつたな 愚 龍

寂し右の手 左の手 風が去る 羅 門
蚊を追はず 佛みつめてある母ぞ 草 村
金の話にさみしき夕 餉なりき 晴 夫
指に觸れた塵貸金もあるんだよ 民 郎

かうした句に接した時、私は川柳の有りがたさを思ふ。如何にも無限の陰翳を擁して豊富な言葉ではないか！もうもぅ私は嘘つばちなお喋りには飽き飽きした嘘つばちなお喋りは女房だけで澤山だこいゝ加減うんざりしてゐるのに、柳壇見渡すかぎり嘘つばちなお喋りだ。女房のお喋りなら一喝してこゝは濟むが、一つばし作家氣取りのお喋りは、座興どころの騒ぎではなく、情なさが身にこたへる

のである。川柳みたいな短詩で、嘘つばちはさて置いてそんなお喋りが出来るかと思ひ議がる人は幸福である。それらの川柳は、女房のお喋りと同様に私を憂鬱にする。

「總ての藝術は、純粹に近くなればなるほど優れてゐる」こゝいふ前提を正し、いさすれば、川柳のやうな最も短い詩形に最も豊富な感情を盛つたものは、換言すれば、最も少く言葉を使つて、最も多くの言葉を語らせるものは、言葉の藝術のうちで最も純粹に近く、従つて最も上等だこ云はねばならぬ。こゝ先日川柳家でない友達の一人が私に云つた「だから君達川柳作家は最も選ばれたる藝術家なんだ」筆先では相當憎まれ口を叩く僕だが、かうした言葉を、ふんふんこゝうなづいて聞くほゞまだ練れてゐないので、次のやうに答へて置いた。古來の傑作小説が、最も澤山の言葉を使つて、しかも作品の純粹性を失はず、説明に墮ちず、記述に流れず、生動迫眞の描寫を保つてゐるこゝすれば、その仕事は、制作過程の遙かに困難なるが故に、その價値は遙かに短詩

の上に在るのだ。こゝ。こゝまれ最も澤山の言葉を語つて、お喋りにならぬ小説も、最も些少の言葉を使つて、お喋りになる川柳との比は云ふまでもあるまい。だが當今大抵の小説はお喋りであり、川柳のうちにもお喋りならぬ藝術作品の少くないこゝは、前掲の諸句が主張するこゝろである。

アルザヨアト土用の畑打たせし 天痴人
烈風……地をはなれたる百姓や 羅 門
みるゝ太き肩や山々がふるめく 同
蛭が眞晝の神經を射て 泳ぐ 同
鶴嘴よりもがんぢような胸の汗 草 村
この鬮を白賣るのがもたいなし 有爲郎
喰ふだけに朝の星から夜の星 啓 秀
次にこれらプロレタリア・イデオロギ
ーから生れた句について書きたかつたが紙がな。次の機會に譲るこゝにする以上、今月は句評でない句評になつてしまつたが、一句一句についての檢討的細評は今の私には餘り興味がない。亦適任者でもなさうだ。近く月評が新しい形式のものに復活されるやうだから、諸君の期待を願つておく。



川柳塔

ひ町・素琴・山緑・合議選

朝田新水

○ 借金苦自殺させてはならぬなり
 肱の疲れをやすむ三味線
 淋しさも嬉しさも皆雲走る
 老の涙の膝つきあはす
 四疊半ふささびしきは齒の痛み
 終電ミ知つて今夜も讀み耽り
 たまの休みの月給を知る

○ 西田 艸樂

保証印手もミが狂ふやうに押し
 はつきりミ言ひきる氣性を妻はもち
 目をつけて置いた役者がよくなつた
 規則書へ幹事も守れぬ事を書き

岩崎柳路

○ ハイヒール股を重ねて喫ふうらら
 孫の手に玩具が廻る寺詣り
 採用が明日に決つた酒の味

◇ 中澤濁水

行水のポブラに灯影秋を知り
 満願を啼く鼻も名残惜し
 電報を打つて缺航遊んでる
 宿直へ飲み荒したるビール瓶
 二人共榮轉の記事入替る
 晝休給仕意外な洒落を言ふ
 仕立屋が見くらべて行く立話
 剃りかけて研いでる床屋手術じみ
 木戸の幕あがる輕業軋るだけ
 大臣は中毒らしい嘆願書
 辻聯珠貶したまんま立つて見る

◇ 水谷 鮎美

いちじくに笛ふきそへばさびしから
 たねなすびまごろむあきのふかかりき
 心おちつきかるい哀しみ
 まごころの武器をあたへぬ闇のなか
 若き陽にてり水はさんらん
 野の青き風をすひたりむほんもの
 自制した浴衣の汗を知り給へ

熊谷紅

泣き止んで確かめて見る手切れ金
兄の智恵水からくりを吸うてやり
好く働く母の寢息の箱枕
三越へ女中を連れる錠を掛け
がま口の小銭を覗くマーケツト
高張を一本立てゝ盆踊り

吉田水車

五圓券うやくしくもバスガール
末つ子の主張が通り海へ行き
ダンサーは働く靴を別に持ち
新開地賺すが如くバスは行く
指一本で止めるタクシ-

日野華水

電燈が来て額縁に蜘蛛が居る
申譯ないこは手紙の上にある
見逃さぬ眼に指輪なきはめて来る
收賄へ昨日と今日の違ひなり
感傷の秋に木の實がなつてゐる

平岩司郎

夕闇につかみそこねたひよ子鳴く
吉報へやつミ臺所灯をつける
からだふきおよぎの子いぬあまの秋
ジツト見た月に心の丸さなき

春元紀太

オートバイいらただしさを投けて行き
手拭ですくふ子供に雑魚がこれ
鶏のアスファルトの上に餌を求め
淋しさは承知ながらも虫の聲

廣江天痴人

鳴子高らかに百舌鳥高らかに
遺族みなけなけに語る特派記事
大根蒔くため手ぐらるゝ西瓜蔓

龜井愚龍

崖くづす姿が僕をさみしくす
鮮人はみえず工事の響あり
土工らが歸るほくらはベツトへかへる

西村明珠

話の切れ間に團扇がベラ
あけすけ云うた團扇の働く事
苦勞して来た前垂をゆづられる

喜多春秋

疊の灯眠りを守る蚊帳が垂れ
考へてのむ盃へ雨の音
別嬪はすぐあまから三仲居注ぎ

姫田夕鐘

剃刀の心で金を貰ひに来

添寝すりや水がぎらく舟世帶
くすぐつたい氣も手傳て逢ひに行く

◇ 妹尾 變人

遊びでも腹が減るかミ笑はれる
貧乏も知らずに殖へる雪の下
手を叩く事をおほえて抱かれる

◇ 市場 没食子

夜泣もう新地へはいる時間なり
暴れてる神輿を二階から眺め
精進は女きようただけでする

◇ 岩垣 奇可愛

だらりミ二本兒の足さけて行く女
裁判所遊びに行けば面白し

粒々集

路郎選

松山 前田 五健
落つる時露の姿もチト光り

切つて放せばコスモスの飛びさうだ
純眞はしばし儲けを云ひ淀み
父兄會此所でも金の有難味

東京 富士野鞍馬

そのうちの薩摩上布がナムバーツン
これも浮世お寺の忙しい
十銭に六十さいふ茄子の色
夙に起き夜半に寝るさいふ社長
出勤の朝を遊びの群ミ會ひ
風邪氣味へ花持つてくる許嫁
見舞客そつミ何だか置いて去に
附添へ耳打してく見舞客

御影 長崎 柳秀

意味のある目つきに思ふ猪口の數
倫落の女は派出に脚を組む
女事務樂しさの有る社に勤め
呼び棄にはつミのほせるむつまじさ
金策のつかず黄昏ぢつミ居る
庄萬よし氏開店十五年を祝して
上爛屋うだく云うて金になり

千日前今昔史 (三)

木村半文 錢

(4) 改良座の鶴屋一座

曾我の家一派の喜劇が、世に歓迎を受けた事が、現在に於ける演藝界の奇蹟であるとするなれば、過去に於ける團十郎一座の大坂二輪加の存在も亦、奇蹟の一つに算しても敢て不當ではあるまい。それ程彼等は當時の人氣を不可思議に吸収したものだつた。

殊に曾我の家一派の喜劇としての旗擧は實に團十郎一座に負うところが多い。と言うのは曾我の家五郎なり故人十郎なりが語るところの如く、當時の團十郎一座が千日前を興行地としながら、其の見物の多數が花柳界は勿論文人墨客の所謂粹な生活者を始め商店の且那方までがワンサーと押し掛け、當時の千日前としては客筋が、良かつたのに刺

戟を受け、「ごうかして二輪加に新味を加えて、あつた見物の喝采を得たい」と着目したのが、曾我の家喜劇を樹立した最初の原因であり希望でもあつた、と言ふのが、恐らく是は五郎なり十郎なりが後に成功してからの實話である以上は、その真因と見てよからう。

事實、團十郎一座の根據地は千日前改良座だつた。道頓堀地帯からは「何だ、千日前か」と鼻であしらはれ、特殊地帯と見做されてゐた其の千日前の一角で、道頓堀のお客と等しい客筋を毎夜々々吸収したのであるから、偉としなければならぬ。昨夜は雁治郎の紙治を見た紳士淑女も、一流藝者も、今夜は改良座の機敷に陣取つて頷をばづして笑ひこけて

ゐたのだ。是が當時の千日前の興行として一つの奇蹟でなして何であらう。

殊に時としては、改良座の機敷に雁治郎も来てゐる、仁左衛門も来てゐる、八千代も来てゐる、政彌も来てゐる、其他何々も来てゐると言ふのだから、其の見物衆の空氣を推して知るべしである。後年圓石、圓藏等の東京落語の一座が大舉して來阪した時も、この改良座に據つたのであるから、以て客種の特殊性を推知するに難くはないであらう。

斯ういふと、その改良座は千日前の何處にあつたか、と問ふ人が生ずるであらう。ところが其の改良座は現在に於ては、殆ど跡形も無い——といふのが、蓋し適切ではないかと思はれる。と言ふのは改良座の所在地は現在の市電が東西に通じてゐる、其の軌道の邊に相當するからである。即ち芦邊劇場の北側に相當する。或は芦邊劇場の北端の一部は改良座の南の一部に該當するかも知れない。

何れにしても、改良座は千日前の中央部に位し、向いは寶樂たにし一座の喜劇に對してゐた。改良座の前身は何と稱したのか記憶にはない。然し鶴家一座の櫛籠る以前は舊劇ではなかつたかと思ふほど、臙ろげながら繪看板らしいもの、記憶が存する。

座の表には西を向いて櫓があつた。いつも
雫茶色の幕が張られ、三柵の中に鶴の字を
染めぬいた定紋が印象を深くした。その櫓に
は梵天が突き出され、よく大入札がふはり
〜と吊り下げられてゐた。

千日前には座と稱する劇場が少なく、當時
千日前の大衆の人氣の中心だつた金澤にし
ても席であつて金澤座ではなかつたのだ。横
井座後の春日座、又は南座、彌生座の外は殆
ど席であつた。だから櫓を表木戸の上に建て
ることは許されなかつた。殊に座は表木戸で
下駄を預り一定の座席へ案内するが、席は原
則として客は下足のまゝで木戸を入り、一定
の通路を通つて自由に腰掛け、又は座席に上
つて見物したものだつた。勿論、この規則は
總てに嚴重に守られたのではなく、金澤席に
しても、寶樂たにし一座にしても、其他の端
席にしても、表木戸で下足を預つてゐたのは
事實だつた。

中央立看板の北側は直ぐに客の昇降口で、低
い土間となり琉球表の疊が敷かれてゐた。木
戸錢は下足蒲團代共で確か、八錢後に十二錢
？だつたと思ふ。棧敷は南北の兩側と中央の
半分と二階とにあつた。然し棧敷と言つても
柵の仕切りがあるのではなく全て押し込み
である。

舞臺面も廣く、花道もあれば廻り舞臺もあ
つた。

棧敷には何日も、花柳界の艶しい提灯が吊
り下げられてゐた。

特に印象の深かつたのは、引き幕の多いこ
と、中にも宣傳用の引き幕が夥しかつた事
だつた。是は現在の曾我家一派が宣傳用の
引き幕を許して、効果を高めてゐるのと軌を
一にしてゐるが、恐らくは機を見ることに聰
明な五郎が籠を鶴屋一派の引き幕に學んで
ゐたであらうことは想像するに難くはない
但し、曾我家が引き幕に附隨する通稱シズ
を分配してゐる美擧は、鶴屋一座にあつたか
何うかは筆者の克く知るところでない。

主として晝夜二回の興行だつたが、晝は至
つて入りか、夜は是に反して大入だつた
一座の座頭は鶴屋團十郎だつた。團十郎は
もと傘張りの職人(或は提灯屋)で、二輪加

の名手だつた。御靈あたりで素人ばかりの二
輪加を祭禮などにやつてゐたらしく、それが
評判の良いところから、自分も好きだし、人
もすゝめてくれるまゝ、改良座に進出して、ほ
んまものゝ興行を打つことになつたらしい
藝名は以前は知玉と言つたのではないかと
思ふ。最も是は記憶がぼんやりしてゐるから
必ずしもアテにならぬが、何れにしても玉
の字のつく藝名だつたと信ずる點がある。

團十郎と改名したのは、其の動機的那邊に
あつたかは知らぬが、要は當時の團十郎の人
氣に肖るためと、今一つは團十郎張りのごつ
しりとした風手が、斯く改名せしめたものに
他あるまい。團十郎は勿論一座の指導者でも
あり又作者でもあつた。×ゴヤー式の藝風で
濫いと言へば濫いし、重厚と言へば重厚だし
鈍物と言へば鈍物であつたし、何んにしても
團十郎を僭稱するほどの貫目はあつた。

團十郎一門の花形は團九郎だつた。練名を
鋤鍋と言つた。ことほ左様に變な面相の所
有主だつたが、その人氣は素ばらしく實に改
良座を背負つて立つと言つても、敢て過當で
もあるまい。後年、師匠團十郎と意見合はず
師匠を追い出して殘黨と共に、改良座に櫓こ
もり漸く時代より置き去られんとする二輪

加の運命を再度恢復せんとして努力することになつたのは、既に此の頃の素晴らしい人氣が、師匠團十郎を壓してゐたのも其の因に相違ない。それほど彼の人氣と聲望は鶴家一門の中に光つてゐたのだ。

團九郎は以前左官職ではなかつたかと思はれる。是も記憶として後頭部の一角に遺つてゐる。

其他、團之助(後の團藏)松蝶(後の金光教の教師)團五郎(團十郎の舍弟で綽名を眼玉と言つた)團八(休業時代が多かつた)團四郎(後の二代目團藏)團三郎(後の二代目團九郎)團道理(後の新町の替間)等實に多士儕々だった。

右の中、團十郎、團五郎、團藏、松蝶の四人が大幹部で、團五郎はそれに準じ、團四郎團三郎、團之助、團道理等は中堅のチャキチャキだった。

何れも腕達者で、今から見れば通俗で、駄洒落、悪ふざけが多く藝風にしても灰汁ぬけが不十分だったことは否めないが、然し、當時の二輪加といふものの本體から割り出してみると、さうした程度のもので、未だしも上乘であつたのだから、現在の藝術眼から律して批評することは穩當ではあるまい、要は當

時の客が未だ此の境地のおかしさを求めてゐたに過ぎないのだ。早い話が歐洲大戦當時洋行から歸つた曾我の家五郎が、本名の和田なにがしに還つて新しい喜劇を見せやうとしても、尙ほ當時の見物の頭に斯の新しい試みを享け容れやうとしなかつたのと同じ道理で、謂はゞ通俗低級にしても、それに人氣が集中する間は、當時の民衆の頭もそれに準じたものを欲してゐるに過ぎない、見ても宜い譯だ。鶴屋一座は斯うして久しい間、千日前の寵兒となつてゐた。

狂言は大抵五種立である。第一は御祝儀寶の入船で、即ち二人の掛合噺である。現在の萬歳は是より派生したものに過ぎない。第二は大幹部を出さず、中堅、ころで新派の二輪加を演じた。第三は一座總出で、多くは舊派の二輪加をやり、俳優自身、各自に淨瑠璃を語り、科白をしゃべるので、大抵は演劇をおかしくもちり作り替たものが多かつた。勿論これは大阪俄の昔乍らの本體でもあつたのだ。

第四、第五は一座總出の新派であつて、時には當り狂言の不知歸とか、金色夜叉を作り替たり、又は當時の社會欄を賑はした事件に材料をとつて、所謂キヤ物を登場することも

あつた。

團十郎は馬鹿役即ちトホケ役が上手で、團九郎はくちぐりではあつたが才腕は師匠まさりだった。團藏、松蝶は共に淨曲の名手でも節も群を抜いてゐた。

團五郎は大眼玉といふ特殊な天産物があつたが藝風は令兄團十郎と共にトホケ役に適してゐた。人氣は鋤鍋につき、彼が出ると見物はごつと笑ふ。恰度現在の蝶六と同じく先天的に喜劇役者として、恵まれてゐるやうだった。

團四郎は鼻が高く、團三郎は眼をしよぼ／＼として能くしゃべり、團道理は色男だったが悪聲だった。

「俄」は本質として落語と同じやうに「落」があつた。「落」のない二輪加は有り得る筈がない。それほど「落」は二輪加に貴重な要素であるが、然し、その「落」は大抵拙い駄洒落に過ぎなかつた。

最も、當時の見物の頭には「落」を左程に重大視しなくて、ただ無暗に笑つたら夫れで良かったのかも知れないが、何れにしても「落」の拙かつたことは否めない。

數ある狂言中、まだ印象がはつきりと胎つてゐるのは榮助はんである。最も是には藝團があるのだが失念した。米に三人の米搗が

あつた。俗稱法律屋が松蝶、道徳屋が團四郎腕力屋が團五郎で、三人は下女(團九郎)のお鍋が手代の榮助(ハシ)に惚れて、飯の肴の油揚げを多く手代にのみ入れ、他の三人にはメイばかりを入れて閉却するのを癪に觸へ、主人(團十郎)に三人が替るゝ抗議を申し込んだ筋であつて、是は當り狂言の一つでよく繰返して演出したものだつた。特に團五郎の腕力屋が赤いサンペを着てゐたので今でも噴き出すほど舞臺効果百パーセントだつた。

ドガチヤガの忠臣蔵、素人芝居、猿芝居との混亂、落語種の四季(國)の枕、頓兵衛、あこやの琴責、夏祭等は今も尙ほ記憶するとゝろだ。

大阪での人氣が沸騰したので、一度一座は東上した事があつた。勿論當時の東京に於ける劇評家の中での評番は「あくどい」一語につきて頗る不評だつたのは當然の成行であらうが、然し、人氣は一般的には素晴しかつた。是を機會に時々東上し、又、他の都市でも興行した。殊に博多二輪加の本場博多では大當りで、後年團四郎が貞樂一座にゐた時代の談に、博多で一と夜に四ヶ所から座敷が

つて身体が持てなかつた、と言うほどだつた。(是の一項は貞樂一座の作者だつた鈍平君からの又聞きだが)

斯うして人氣の中心だつた鶴屋一座にも遂に破綻が來た。それは餘りにも常套的な彼等の趣向が漸く時代の流に抗し得なかつたからだ。謂はゞ時代は彼等を置き去りにして滔々乎として流れ去つた。

この時代の空氣を看取して、新しく乗り出さうとして端しなくも鶴屋一座は分裂した。ごまでも保守的の立場を出まいとした團十郎は舍弟團五郎と共に改瓦座を去つて、堀江市の側の明樂座に再擧を劃し、往年の宿敵大和家寶樂と握手して、可なり的人氣を呼んだ。

改瓦座に残つた團九郎は團四郎、團三郎等と共に大車輪に孤壘を守つたが、既に松蝶は金光教に走り、團藏は一座を去り、他には若手の新進があつても、一旦崩壊した人氣は盛り返すに難く、後には京都の人氣者信濃屋尾半を招いて合併興行を打つたが、それすら一時的の線香花火に過ぎなく、幾程もなく遂に没落してしまつた。

團十郎、寶樂一座も改瓦座の没落後に同じ

道程を歩んだらしい。

斯うして大阪の二輪加は、其の存在を完全に失つてしまつた。

大正年間に團四郎、團三郎の兩人が新世界の一角で矢々渡を演じたが、既に時代の力は完全に彼等を突き落して、僅に一二回の興行で影をひそめた。後に兩人共ルナパークの貞樂一座に入つたのは、二輪加の末路又哀れむべしと思ふ。殊に團四郎は團藏を、團三郎は團九郎を襲名してゐたのだから、昔の人氣と對比して、僅に貞樂門の端役に甘んじてゐる兩者の當時を考へ、筆者は窃つと喩をあつてしたのも再三だつた。榮枯盛衰は世の常とは言ひ乍ら餘りにも變轉が激しい事だつた。

因に、後の樂天會の人氣を背負つた澁谷天外(現在の天外の父)は實に改瓦座のカザ打ちで拍子木を鳴らしてゐたのだ。後に團市?或は團吉かと言つて舞臺に立つたのだ。彼が改瓦座の隣のうごん屋でキツネを吸つてゐた事を筆者は子供心に記憶する。

鶴屋一座が完全に土崩瓦壊して今は其の形跡すらも見失つて了つたのと、同じやうに往年の千日前の人氣を、双肩に荷つてゐた改瓦座の根據地も、電車やタグシーの轍に委し

て殘骸も止めないのは、何ぼう寂しいことであらうも知れぬが、あゝして兩者共に完全に消えて無くなつた事は、一面から見て、却て綺麗さつぱりとして良いかも知れぬ。

(b) 寶樂たにし一座

鶴屋一派を語つた以上は、寶樂一座を語る譯には參らぬ。彼は鶴屋一座と向ひ合つて興行を續け、同じ二輪加の畑にあつて、實に血みごろの競争を續けたものだった。往年の雁泊郎と仁左衛門(我當時代)の對立が道頓堀の空気を煽が上にも緊張せしめたので同じく、千日前の二輪加の人氣争奪戦は、鶴屋と大和家との對陣だった。

勿論、人氣は鶴屋側にあつて、いつも凱歌は改真座に擧つたことは事實だ。然し、それは必ずしも鶴屋側が大和家側に比して全てが優れてゐた譯ではない。要は、人氣に於て勝利を得たので、決して技量に於て歴倒的に優越してゐたのではない。

殊に寶樂の藝風は大下一品だった。非常に氣品に富んだ男だった。男もよし、體格も立派だし、特に淨瑠璃に於ては彼に比肩する者は一人もない。鶴屋一座に光つてゐた團藏、

松蝶に於ても、寶樂の前には其の光を薄くしたのは否まれない。非常に美聲で且つ曲筋は巧みだった。朝顔や河古屋などを演出すると實に上品な二輪加だった。團十郎程のトボケた可笑味は無かつたが、ごことなく氣品に富んだ澄い藝風があつた。

寶樂を助けて右の腕となつたのはたにしである。彼は敵の副將團九郎と對して遜色はなかつた。而も彼は團九郎が鋤鍋の異名を唱はれた如く、其の藝名たにしに總はしい滑の稽たる顔面を所有してゐた。謂はゞ喜劇俳優としては先天的に恵まれた風半の持主だった。よく活躍し、よく笑はせたが、遂に大をなさず、後には其の消息も絶へて了つたのは好漢不遇の裡に斯界を諦めて去つたのではないかと思はれる。

たにしと共に寶樂の左の腕として働いたのは芝鶴だった。この人も藝風は洒脱だったが多く恵まれなかつた。

其他、小芝鶴、小寶樂、寶太郎等の腕達者が活躍してゐたから鶴屋一門に比較して、さしての遜色も見劣りもなかつた。然し、いくら努力しても人氣の左右するところは人爲の及ばぬところだった。謂はゞ鶴屋は人氣の

好運に恵まれ、大和家は人氣の悪運に禍はされたものに過ぎない。

寶樂の楯籠つた小屋の座名を失念したが、其の所在地は樂天地即ち現在の歌舞伎座の北側であらうと思ふ。改真座と殆ど眞向いに對してゐた。改真座よりは少く狭い面積だったが、いつも改真座よりは入場者が尠く、筆者の覗く度にガラッとしてゐたのは心淋しく感じた事だった。

寶樂一座は、鶴屋一門が分裂する以前に、千日前を去つたと思ふが、後に寶樂は團十郎と妥協して遂に堀江明樂座に據つたことは既出する通りである。

其後、團十郎と共に明樂座を去つてからは筆者の記憶にはない。然し、芝鶴が喜樂會の旗擧に参加してゐたのもうつすら覚えてゐるし、小寶樂、寶太郎が彌生座に根城を構えてゐた事も、つい近年まで知悉してゐた。

だが現在は何うなつたか、往年の如く飛び歩くことが出来なくなつた筆者は、彼等の現在の消息を知ること出来ぬが、然し、恐らく鶴屋一門の没落史と同じやうに、時代の力に抗し得ず、有爲轉變の世の中を慨嘆してゐるのではないかと、實は想像してゐる。



柿の皮

長野吉高

この夏フトした機會に昭和四年版「下谷上野」さいふ本を走り讀みしてみた。初代二代廣重や國芳の繪、それに地圖入りで死んだ内田魯庵、笹川臨風、久保田萬太郎、北原白秋、三田村鳶魚、岡田三面十さん、その他の人が、江戸時代の下谷上野方面をそれくゝの立場から解説執筆されたものである。三田村鳶魚さんが「何時も通り」の中で唐子踊唄さいふものを引用されてゐるが、これは江戸時代の一の見世物で、その文句がなか／＼面白い。「一けんしやく／＼ア一けんさんちきつてんつひめもく……」こんなフシで唄ふか、こにかく餘り面白い文句なので三田村さんに「引用のもので全部か、他に同種な唐子唄はないか」を尋ねしたら「

あれだけだ」こすぐお返事があつた。岡田三面十氏が「下谷上野に關する古柳句」を書いてゐられたので、この唐子踊唄の川柳はないかこさがしてみたがなかつたやうだ。當時の柳人が、この踊のこまを見逃してゐる筈はないと思つてゐる。

○ 戯曲でも小説でも同じだが、ほんたうに可笑しいこまはなか／＼容易に書けるものではない。笑ふ爲めに笑ふさいふこまもいゝかも知れないが、然し私は多くの人のいふ一九の「道中膝栗毛」なぞいゝものには思はない。むろん私の「柳の絮」なんぞ實にくだらぬものである。世の中一寸みるこ可笑しく、よく見るこ悲しく、更によくみるこまた可笑しいもの

だと思ふ。私はこの論法で執筆してゐる純粹に可笑しいこまは、これを發見するにも大きな才能が必要である。川柳に就てはよく知らないが、然しその極意はやはりこゝらにあるのではないかと思ふ。だから、無爲なだしやれや輕口に走る川柳人を輕蔑する。

○ 何んであれ世に名前を知られるさいふこまは、その人にまつてこれ以上の愉快はあるまい。だが、世間ほご出鱈目なものはない。麻生氏が武藤山治氏に會つたら「かくれたる天才ですね」言はれたことが、八月號で拜見したが、定めし麻生氏としては苦笑ものだつたこま／＼お察しする。これで思出されるのは、私が數年前のこま、かなり有名なある演劇雜誌に歌舞伎の脚本解題を二ヶ月程書いたら編輯氏がその後記へもつて行つて「長野氏は知る人ぞ知る、關西に於けるかくれたる我が演劇研究家である」こ太鼓をたゝいてくれたこまがある。流石の私も、これにはアツク仰天したが後の祭、文字通

り苦笑させられた。なるほご私の専攻は劇文學には違ひないが、然し日本演劇では、ない。通俗的一般的な方面でないからジアナリストから見ればかくれたる言へないことはないだらうが、さりとてこれには參つた。たゞ、タイマイな原稿料だけは間違ひなしに貰つたが、これは借金拂ひに右から左へ——。これだけはかくれた事にして置きたかつたが、いや浮世はまゝならぬ。

○
 またしても麻生氏のことになるが、八月號で愛嬢純子さんがさういふ方かを始めて知つた。純子さんの書かれたものはシミ／＼と讀んでみた。子として父を思ひ、父の仕事を凝視するあの眞摯な氣持にドツミ胸を打たれて了つた。

話は別だが、何時だつたかの婦人公論に郷黨の先哲櫻井忠温さんが、許嫁された娘さんに限り無い名残りを惜しまれ、分親としての深い愛情を述べてゐられるのを見たが、あれを讀みながら私は思はず泣かされた。親ミ子ミ、そんなこと

情の現れほご人の胸を打つものはない。

麻生氏は立派なお子さんをもつてゐられる。この前、アート、リ、ちやんを知つた私は、また純子さんあるを知り、麻生氏に限り無い羨望を感じる。私にはかうして自分を温く激励してくれる者が無い私達のやうに精神的な仕事をする者にまつて、これほご寂しいことはない。麻生氏は、純子さんに對しても益々自重されたい。そんな味方よりも、そんな聲援よりも一倍この若い理解者を失望させないやう努力されたい。新川柳さいふものがさう社會進出するか、また怎う理論が變るかそれ等が有意義か無意義か、ミにかくさうした事は畑違ひの私にはよく解らないが、純子さんはさうまでも賢父を信頼してゐられるがいゝと思ふ。あの書かれた事は、なか／＼味ふべきものがある。この頃の文科大學生に、すこし筋の立つた作文をやらすミロクなことを書かない。名の如く純な純子さんの向後のご勉強を祈る。

柿のこゝろ

町 二 生

ピチバラ／＼、ピチバラ／＼、雨かともがふ柿の花が、六月の宵闇に音たて、散る。白い部厚い小さな味もつけもない花である。けれどもこの花の散る音をき、乍ら、句を案じるのは楽しい。

柿の新芽は四月に出るが、この頃思ひがけなく霜が降ることがある。この遅い霜に見舞はれると、新芽は悉く犯されて、又新しく出た芽には、六月になつても花が咲かぬ。従て秋の收穫がない。農家では慌て、一家總出で手のとやく限りの幹へ枝へ水をかけて廻る。新芽を一々洗つてやるのに、越したことはないが、大きな木になるとそれは出来ないことだから、幹だけにでも水をかけてやると、芽の損傷が少くて済む。

さて秋になると、干柿を造るために、柿の皮を剥ぐのが、夜の爐邊の仕事である。むいた皮は、繩の間に挟んで、軒端などに柿と並べて吊して置くと、冬のはじめからからに乾いて、同時に内側の部分に白い粉を吹く。この皮は、冬の間の子供達のお菓子代りをつとめ、又火で炙つて石臼で挽くと、野趣豊かな「柿の皮粉」が出来る。



教會

安井ひろし選

悪しきをば拂ふみんうづく^り 紫雲
 新開地先づ教會が聳へ建ち 笛秀
 教會で祈りつゞけて年が老け 西貴子
 教會の隅にいびきの聲もあり 巴調
 教會の椅子に斷髪かしこまり 美津女
 教會の夕月人の子の惱み 春秋
 教會の屋根眞白しよい月夜 方眠
 教會が故郷のここを思はせる あや美
 お祈りの前に己の姿を見 青兒
 教會へ行く氣になつて罪を知り 南葉
 教會で逢ふに違つた人のやう 菊路
 姉の兒を抱いて教會から戻り 新水
 教會のカード貰ひに子供行き 琴舟
 教會へ遅刻して來てせまく掛け 永樂
 教會へ一人は聖書忘れて來 虹一
 教會を出る赤い髪黒い髪 曉童
 教會を出てネクタイをゆるめて居 岩石

教會の塔が目星の火の見番 壽患兒
 教會に今日も平和の鐘がなる 青柿
 教會の上も降つてる夏の雨 幸村
 教會の窓あたゝかい灯がこもり 富美三
 教會は神秘を秘めたやうに昏れ 白丘士
 信じてる神に教會淋し過ぎ 華水
 聖堂は悲喜交々の式を擧げ 世都象
 教會の葬儀悔みに口籠り 鯉友
 教會の式へ起たされ座らされ 叶旬坊
 教會で不運同志が落ちる戀 孤鶴
 教會へ來てお日粉が派手に見え 英賀夫

池

久々の歸省へ池の水を換へ 青豊
 蓮音の池から庫裡の朝になり 春秋
 子の腕に池の廣さに落ちた石 千波
 貧農へ池はつきりミ底を見せ 青柳

中見光路選

教會の朝髯剃つた顔ミ顔 明珠
 教會屹然ミ兄弟にして寄りつけず 禿山
 教會で手淫に近き祈り知る 天痴人
 神の子ミ説けミ社交のいる所 暢山
 教會は金をくれないミころなり 柳夢
 教會でできく天國の美しさ たし路
 天國の話聞いてる俄雨 松之助
 失業の眼に教會の塔高し 吾水
 教會の晝を靜に犬が居る 今雨
 迷ひ犬教會へ來て叱られる 柳次
 教會の裏で牧師は鶏を飼ひ 紅
 耳違ひ牧師の教會雨が漏り 葉光

佳句
 教會の壁はろくくミ牧師老ひ 佐一郎
 オルガン位では奇蹟現はれず 勝二
 うつかりミ這入ミ讚美歌唄は 富士雄
 教會の鐘に百姓腹がへり 裸人
 教會にテロの下界を見下され 沐天

投げた麩で争ふ池に鯉の群 壽患次
 一坪に足らぬ池にも月は澄み しみし
 池のある方へ座敷を替へて呑み 吾水
 埋立てた池思出のあこもなし 明珠

又元の池へ戻つて逢ひつゞけ 今雨
池を這ひ出て 蟾蛙考へる 白丘士
眞晝たゞ池をあひるが泳ぐだけ 虹一
石投けて池の波紋のつきるこゝ ちし路
自轉車を倒し木蔭の池へ寄る 新水
早魃へこれが最後の池を抜き 菊路
傳説の池も時勢に縮められ 巴調
夕立に池の面なる輪がもつれ 華水
池へ来て無言の二人石を蹴り 水車
池の水淋しく落葉浮いてゐる 紅
池水が抜けて村長もごつて来 裸人
迷宮の事件池干す物すごさ 錦石
古池へ蛙が込んだ阿呆らしさ 沐天
生れたは池も困んであつた家 同
流れ星池へ無氣味な影を曳き 鴉天
枯池に明日も早の星の色 同

幕

◇ 二 南 選

幕少し破れ舊家ミ云ふ構え 富美三
兄弟の意氣に狩屋の幕が揺れ 巴調
幕間に樂屋の握手寫される 松之助
目出度さを孕んだ幕へ黄昏れる 玉兒
その頃の景氣を想ふ幕があり 南葉

古池へ傳はる謎の死がつゞき 青鬼
をしごりの痴情の波が輪を折く 同

佳 作

只ならぬ雲蓮池の鯉が眺ね 白丘士
たゞりなき云ふて居れ池を埋め 水車
二遍目に來た猿澤の池子を連ねて 明珠
蓮池へ善人しばし立ちつくし 英智夫
公園の池がまだるい波を立て 今雨

(人)

思ひ切る氣も出ず池の水は澄み 新水

(地)

釣池で會つたは鹹首になつた後 春秋

(天)

睡蓮の池へ佳人の歩が重し 勝二

(輪)

子の聲で自性にかへる池に立ち 光路

楊井二南 共選

媚を賣る女へ緞帳きらびやか 方眠

曲馬團あいさに幕を開けて見せ 笛秀

引幕の裾へ切られた奴か起き 新水

幕張の外で接待くたびれる 紅

中賣は幕間へ聲の急がしく 四五磨

引かれ幕孕もうこして手にあま 春秋

幕開きは茶店女のひこり言 同
幕張つた方へ土産をさけて來る 幸村
村長の娘を貰ふ幕を張り 同

幕開けば二十年が無事に過ぎ 葉光

一幕にまこめて義理も人情も出 同

幔幕を張り詰めてゐる借があり 同

幕の内何か揉めてゐる素人劇 孤鶴

哀愁の幕にからまる香の煙 雅天

大見得は幕の下りるを待つ姿 同

素人劇幕一重に氣が疲れ 水車

洋式の幕が老人氣に入らず 同

天幕を張つて一應這入つて見 白丘士

天幕村つかめばつかめさうな星 同

紙芝居明日を約して幕こなり 同

月給日開幕へちみ早すぎる 明珠

目出度さは幔幕に吹く風もよし 同

澤山な謎を残して第二幕 同

五 客

幕間に知つてる筋を得意がり 白花子

幕下りてから挨拶をはじめられ 新水

幕間へ喋舌る女の首長く 同

肩の凝る三等席へ幕があき 明珠

夏帽を一つ脱がして幕が開き 同

三光

幕間は棧敷へ腹をたて、置き 慈雨來
開幕へ母の素直な膝頭 白丘士
紫の幕信心の名を並べ 紅

(軸)

幕開いて邪魔臭い世辭を聞き 二南

◇ 華水選

幔幕を張り詰めてるて借があり 孤鶴
幕あいて話そのまゝこぎれたり 曉童
紅白の幕へビール泡が飛び 青兒
黒幕のあやつる糸へ引つかゝり 暢山
引幕の埃が散つて夏祭 あや美
餘韻まだ幕のあつちでひびく 吐句坊
全幕の甘美に戀が笑つて居 朴甫

又新柳壇新設

「姉」 日野華水選
「喜び」 日野華水選
各題五句以内
締切 十月十五日
用紙官製ハガキ
「又新柳壇」と朱記の事
賞品秀逸句にメタルを呈す
(投吟先) 神戸市神戸區中山手通七
丁目一七七日野華水氏宛

新誌友

(七年九月廿七日まで)

(川柳雜誌) 前金半年分壹圓八十錢以上拂込
の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致し
ます。何卒新讀者を御勧誘下される様御願ひ
申します。御紹介下さる方には川柳雜誌の
近刊を見本として差上げますから、お申込み
下さい。(綠雨)
白井良坊、小寺鳴玉、吉田晚春、辻遊歩、藤澤
白菊(梅田支部)岸作太郎、西田艸樂、岡崎桂
枝、中村幸七、山本葉光、豊田繁堂、關根五右衛
門、村田正治郎、谷口水人、江戶みつる、山崎邦
雄、河野夜王、真田泰典、名越不然、須山龜一、田
竹内機見、友野梅坡、長景雄、柳岡詩朗、田
中路城(本社事務所)括弧内は紹介者

ボロ幕で荷物包んで旅役者 同
幕合ひの酒が悲劇に廻りかけ 明珠
目出たさは幔幕に吹く風もよし 同
幕合ひに逢ひたくはい人に逢ひ 白丘士
泣かされた顔幕合のコンバクト 同
盛装の頭を下ける幕の紐 紅
紫の幕信心の名を並べ 同
幕張の外で接待くたびれる 同

佳作

正直に話して幕を借りられる 永樂
夏帽を一つ抜がして幕が開き 明珠
目出度さを孕んで幕へ黄昏れる 玉兒
隠れん坊かすかに幕が動いて居 紫雲
開幕へ母の素直な膝頭 白丘士

轉居と改姓

▼太田朝陽君は大阪府泉北郡助松 六〇二へ
▼片桐靈壺君は大阪府中河内郡布施町東足
代六八二▼岩崎柳路君は奉天紅梅町七みど
り屋方▼木橋防茄子君は樋口と改正され
ました。

正誤

前號十三頁下段六行且域を脱し得た、同五
○頁上段怖ろしい過去を包んだ金紗にて、
水車
五九頁下段の「噫」路郎選の琴人の二句は紫
石の誤

各地柳壇

＝れ創を句るあちのい＝



本社柳翁忌

九月三日夜

於ちごせ倶樂部

漸く三伏の苦熱を逃れて、空の美しさ星の愛でたさに心奪かれる頃、同じ趣味に生きる人々が集つて、初代川柳翁の忌を營む事は誠に深い感銘を與へるものである、此の忌の目的や名目に就いて種々議論を上下せらるゝ、柳人もあるやうである。勿論此の忌をより意欲深くしたいと云ふ念願から出發した、議論ではあらうが、徒らな論争に没頭するよりも本當に志を一つにする人々が、便宜な時に便宜な場所を集つて心から翁を偲び、其の遺された道をよりよく育て上げる事に専念したものである。

當夜琴人氏は兼題の披講に先立ち「生醉」に對する体験と其の創作句を語り、題を如何に取扱ふべきかと云ふ問題に對し、幾多のヒ

ントを與へられ、山雨樓氏は其の持論である選者は選句に對し三才を附すべきであると強調された後其の三才の句を短評せられた。尙同氏が數ヶ月以前から企てられて居る清記互選の成績を當夜初めて發表の運びに至つた事は同氏の携まざる努力の報いであり、將來愈々堅實なる發達の希望を抱かせるに充分であつた。

唯來會者一同の最も遺憾に堪へなかつたのは路郎主幹が俄かの病氣で、御出席が出来ず、其の熱辯を拜聽する期待が外れた事である。(杏三記)

(參會者)

綠雨、麗光、柳次、機見女、默平、杏三、山雨樓、豆秋、裸人、夕鐘、白峯、一久、素月、小柳子、松之助、鶴峯、琴人、かほる、水車、葉平、鳥語、波濤、里十九、小松園、鐘生、亂耽、八步、町二、掉二、鳴玉、鮎美、遊歩

晩春、白菊、おさむ、いわを、夢裡、らせん
樞太郎、禿山、秋無草、北人、みつる、いさ
む、新水、紫石、龍美、明暗子、鶴足、柳民
丹人、變人

兼題 沈 默 町 二選

なる様にしかならないと母黙し
沈黙の父となり子の寢息きく
沈黙の夜半へ嬰子のこゑがして
行末を思へば重し唇が
沈黙の手に持つ物は頼信紙
沈黙は反つて苦かい酒と知り
酔つたあと沈黙つやく男の淋し
沈黙の隣で笑ふ聲を聞き
沈黙の淋しきひとみ感じたり
黙々と地球に遅れまいとする
沈黙の屋敷にしきりベルが鳴り
沈黙へ笑みを浮べんデスマスク
沈黙の父へ子供のあまへたし
黙つてゐると内容證明が来る
沈黙に怒がにじむ口返事
沈黙の營養不稔とも見られ
沈黙の母の涙が吾れに生え
沈黙の座敷の裸婦の額が見え
沈黙その愚かさを知つた秋
萬策盡きた沈黙の椅子五脚
沈黙を守るにあらでえぐ馬
ため息もかほるゝに金の事
沈黙へ課長は咳を先づ聞かせ
沈黙へ電燈隅の方にあり
沈黙の我をはなれていく心
沈黙の一人は雲を見つめてゐ

柳次 同 小柳子 掉二 丹路 琴人 杏三 裸人 柳民 新水 秋無草 鳴玉 波濤 水車 明暗子 夢裡 一久 鳥語 兼光 明珠 清美 香峰 あや美

四點思惑があつて空地に草が生え
同 蚊を追ふて空地の草で語る
同 切れ話空地へ来ると腕を組み
三點廣少場に藁が一定だけの雨
同 空地も香具師大聲に人を呼び
同 そこの空地も三勇士
同 板圍ひ地下室でもあつた跡
同 鮮人は空地へ箱の家を建て
同 頑固さは空地のまゝでほつて
翠 夢

兼題 雜 旅にて 清記 互選

八點見るは兒の夢枕の白すぎる
同 アトリエの風に色を裸婦の夢
七點煙草錢と云へば七錢母は出し
六點アパートに住み思ふ宵の口
同 耳を揃へて豚の子ら豚の匂
五點あてにと居た提灯が横へそれ
同 有難く受けた辞令の光る艶
四點梅の實はすつげし妓膝を立て
三點眼をさますひるいつちの上
同 勤めるときは思へない女事務
同 つめたき肌を愛する朝たぬは
同 思ひ出をおむる變へる若い母
同 一息の坂へ地んだ靴の紐
同 戀に疲れて死線をさまよう

翠親籬川句會(鳥根)

九月三日夜 兼題 於アサヒ食堂 緑之助選 田鶴緒

弄ばるゝ戀とは知らぬ片斷
はにかみの指間にホッリ片斷
(人)賣春婦鬢の底にある呪
(地)鬢ふと消えて瞳の輝ける
(天)まろきはくば鏡に紅を囁む

兼題 俠 氣 羅 門選

俠氣を立てれば損をする事ばかり
社長の前にすつくと立つた俠氣
横丁に住み任俠をうたはれた
(秀)頼まるゝまゝ全身に湧く俠氣
(同)強くうなづきすつと立ち上る
(同)さはあれど俠氣の程の金がな

席題 米 海 月選

百姓の努力だ米となる日ぞ
賣る米もなく百姓の末日々
(人)朝に哀しき天窓が白む米も
(地)餓ゆる眼に米一粒の誘惑や
(天)上納をする米これだけの山

席題 雨 比紗緒選

百姓の愚痴へ秋の雨つゞき
失戀へ雨なと降れと腕枕
雨た雨だ橋險悪となる恐怖
黒き雨が降る泣いてみたい夜
(人)蜘蛛の巣がわかれ寂る雨ふる
(地)秋近く雨の露臺の哀愁や
(天)清算し切れない戀に秋の雨

甲賀のつどひ(滋賀) 緑之助

九月七日 蒼太草庵 蒼太 報

宵々をセル肌寒く星を見る 蒼太
夜學の窓の空はすつきり 同

秋来れば又來ん秋を待つ心 榮多樓
秋の街一丁手前で聞くラザオ 小雲
冴え渡る月を眺めて夜の冷え 同

川柳 加茂川句會(京都)

雜誌社 九月十一日 於仲源寺 平岩司郎報

席題を一夜に一題二十句と言ふ支部とし
ての研究的態度から變つた試みをして見ま
した政悪が成功が、當夜全出席者にも感想
を発表して頂く事に致しました。天王寺支部
神戸支部の各句會日と重なりましたが、鮎美
夕鐘、新水、翠夢、珍客葉平、滋賀縣から
蒼太の諸氏、京都側から紫明氏、幸男兄に代
つて清堂氏其外二十五名の御後援を給はり
嬉しく思ひました。

兼題 期 待 紫 明選

卒業の期待に副わぬ初任給 啓秀
期待せし事もつまらぬ薬瓶 梅香
應接間期待大きく待たされる 好瀨
裏切られし期待帽子の重さ知る 豊次
脱帽をすれど期待に裏切られ 新水
宵待に明日思はせる丸い月 ゆきら
小抽斗何か期待の音で開き 木公
かたむいた猪口へ期待は濟し込み 金波
性こりもなく期待する一人なり 鮎美
期待した名刺に社長ふりむかず 富美三
飛行服期待されてる都市が見え 双光

南部選手 國民の期待の中に許婚 草村
金もうけ妻は期待をせぬと言ふ 蒼太
まともに灯をうけて期待をみる眼 清堂

ゐるので皆様の御後援を御願ひ致します。

席題 旅

互

遊歩

初旅の宿の枕へ寝付かれず
宿の庭にたづめば藍の香が流せ
旅の宿たんずのあるも嬉しくて
風に雲に女を描く旅なりし
石段を背負ふて寫る旅便り
トランクがと齒ブラシをろんで出
旅だよりむこうも雨が降つてゐる
旅に出て子供事をふと思ひ
伴れてゐる女は旅で出来たもの

ト居
同
愚陀
水車
掉二
おさむ
一久
千春

村芝居鬘の人になり切れず
びつたりと鬘の合つたあでやかさ
鬘だけ見れや恐しいものでした
悪役の鬘が似合ふ面に出來
ようきんな男鬘を横に向け
鬘着て舞臺の父は眞面目なり
西洋人鬘付けたと寫される
美粧院の鬘はみんなあつち向き
鬘屋にひし〜夜かせまる也
茶坊主の鬘の青き親しまれ
名優へ鬘は思ふやうになり
二役の鬘へとまる夜の蠅
素人劇カヅラが痛い正念場

かほる
八歩
同
みつる
掉二
夢裡
千春
榎太郎
一久
葉平
おさむ

お手植は土の香りに盛り上り
歸省して生れた庭の土をふみ
稻の香の郷愁に土を握つてた
秋のタツ子の土はつめたし
この寂寥を土に埋めむ
(軸)桐の葉が落ち土にうつくま

愚痴ばかりならべ女は眞面目なり
何事も主人は愚痴にしてしまひ
姉の愚痴ごもへ乳房ふくませて
愚痴ばかり言ふて後妻死んでゆき
愚痴言つた終ひとい〜寝てしま
人生を愚痴は淋しいものにする
愚痴云はぬ男であつて金をため
愚痴云ふて歸る提灯消へか〜り
その愚痴をそつとおさむ目の動き

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

半釣の蚊帳が小供に面白し
新婚の蚊帳にあき陽がさしてゐる
首だけを蚊帳から出して西瓜食べ
寝ころべば蚊帳の天井がひくす
蚊帳の四隅が疲れた寢息聞く
蚊帳をはずせば男の軒雀なく
蚊帳の香が流れた宵の郷愁よ
母一人蚊帳の外での物思ひ
兒のため吊る十月の蚊帳たれて
病妻の蚊帳が怪談めいてある
宿直は蚊帳を丸めて濟ませとき
叮嚀に蚊帳がた〜めぬ獨り者
母一人娘一人古い蚊帳を釣り
郊外の氣安き宵の蚊帳をつり

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

新生活の疲に似たる蚊帳の色
八疊の蚊帳に一人の淋しすぎ
十六ミリ蚊帳に寫して避暑の宵
寢苦して蚊帳にも足のもたせたく
歸省して蚊帳の古きの親しまれ
六疊の蚊帳へ六人の子の寢息
田舎出て此蚊帳だけが残つてゐ
(人)はづされた蚊帳に未の子は眠り
(地)新世帯蚊帳を豫算に入らぬす
(天)一組の繪はがき蚊帳の中を見

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

指一つ落した女工へ鐘がなる
女給の指にマツチは細く燃え上り
節太い指で古郷へ便りかき
指踊りタイブライターわめいてる
金庫の鍵へ指跡が恐ろしくなり
歸朝して指す富士は暗れて居る
ペンだこ吾れなきぬるく生て在り
ましろき指が夜をくすぐする
ごうしても三つを出來ぬ子をほそ
快方へむかつた指を描へて見
堂島は指の動きへ氣が尖り
(軸)戀を知る指のダイヤのものを

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

生活の疲に似たる蚊帳の色
八疊の蚊帳に一人の淋しすぎ
十六ミリ蚊帳に寫して避暑の宵
寢苦して蚊帳にも足のもたせたく
歸省して蚊帳の古きの親しまれ
六疊の蚊帳へ六人の子の寢息
田舎出て此蚊帳だけが残つてゐ
(人)はづされた蚊帳に未の子は眠り
(地)新世帯蚊帳を豫算に入らぬす
(天)一組の繪はがき蚊帳の中を見

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

指一つ落した女工へ鐘がなる
女給の指にマツチは細く燃え上り
節太い指で古郷へ便りかき
指踊りタイブライターわめいてる
金庫の鍵へ指跡が恐ろしくなり
歸朝して指す富士は暗れて居る
ペンだこ吾れなきぬるく生て在り
ましろき指が夜をくすぐする
ごうしても三つを出來ぬ子をほそ
快方へむかつた指を描へて見
堂島は指の動きへ氣が尖り
(軸)戀を知る指のダイヤのものを

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

訪へば鍵穴に住むタルシニイア
一人一人死んだと見へぬ顔の色
顔色を見る子を繼母はさびしがり
顔色へ居候こもウハタキ打ち
あくびして色よい返事待つてゐる
お土産も色分けにする子澤山
夜の色に嗤ひをとかし娼婦生く

兼題 蚊 帳

兼題 蚊 帳

山雨

樓選

紫石

一多郎

柳郎

八歩

夢裡

琴人

同

榎太郎

同

かほる

人選

あや美

おさむ

紫石

同

みつる

八歩

葉平

愚陀

ト居

掉二

水車

琴人

耶選

愚陀

榎太郎

同

紫石

同

水車

丹路

色 消の話と別に星流れ あや美

(人)それと女給らしきを柄に見 同

(地)風の色ある夕べの心、儂なし 葉平

(天)蝙蝠のかなしき色を求めたり 鮎美

雑詩社 塗青句會(大阪)

熊谷 紅報

迷 信 虹 一選

迷信の祖母へすなをな母であり 西英子

迷信を信じた息の淋しすぎ 新水

迷信に釣込まれてる母性愛 碧郎

迷信を夜學の教師笑ふのみ 鮎美

迷信を嗤ふ男の瘦せてゐる 同

迷信を叱かつてからの注射針 章

お利やぐがあつて迷信疑はず 紅

(人)病んでゐる母の迷逆はず 紅

(地)迷信のどこかに隙のある話 碧郎

(天)泉水を續く不幸に埋めさせる 碧郎

街燈の下で語るも不仕合 新水

街燈をはなれ二人は語り合 元山

街燈の影も延びて立話 虹

街燈の光をあびた放浪兒 鮎美

蜘蛛が巣を張る街燈へ灯がともり 章

街燈の影がレールへ斜に延び 西英子

見覺のある街燈の暗い町 紅

繁昌な街を停電騒がせる 峯選

繁昌が續げど伴病んでゐる 元山

繁昌はしが惱みのある暗さ 西英子

繁昌へ笑顔で暮れる日續く 同

繁昌になれば近所に眞似られる 碧郎

繁昌へ来た義弟の手を借りる 鮎美

繁昌(兄)を抱く暇もなかりけり 同

繁昌な昔に變る店仕まゐ 新水

腕組(向)の店はよく賣れる 紅

満員のあいそ客を叱るやう 同

(軸)繁昌にけふも女將は終ひ風呂 鶴峯

綠雨居偶會(大阪)

橋本綠雨報

九月七日夜 同

庖丁を持つて押賣り断つて居 鮎美

腹ばひの兒を押賣りは笑はせる 同

押賣りと別にじろく覗き込み 葉光

押賣りへ内氣な妻でなかりけり 今雨

客が来て押賣りそれきりになり 同

一人だけ乗れば車掌の不愛想 白柳子

パスの歸途 同

八月十日 同

外燈の明りで鼻紐上げておき 明秋

外燈に弱い女の立姿 春秋

呼び出しに來て外燈に照らされる 同

外燈の下で見送る消防車 明秋

黒い腕夕飼の濱へ波を切り 竹風

將來の事で過去をば黒く塗る 明秋

黒幕の男小柄で髯があり 華水

黒眼鏡よんと笑ふ事があり 春秋

野次で野次切れない主義の差異 竹風

巡査來てそれから野次は場所を 華水

衝突へ巡査は野次の事を聞き 同

お轉婆お轉婆と悲しい野次 春秋

公憤の毗へ野次野次の衆 同

すさんでる心へ刺戟のない眞晝 華水

慣れ切つた刺戟に女窓を明け 同

巷二居偶會(松江)

奈良井柳人報

九月九日夜 同

席題 シャン拳 互選

シャン拳の子供に立木に夕焼る 硯滴

シャン拳でさて始まつた隠し藝 巷二

シャン拳で負けた方も愚痴を云ひ 祥月

シャン拳に負けるとする眼の動き 墓秋

シャン拳へ調子の合ふた聲になり 柳人

シャン拳で決めるも男のいゝ度胸 同

席題 宿 命 柳人選

宿命にしては果敢い薬瓶 墓秋

どん底へ落ちて宿命だと思ひ 硯滴

宿命から逃れられず土を掘り 同

丸窓は開いてる宿命の三味線 巷二

席題 雲 墓秋選

ちぎれ雲一人ぼつちで何處へ行く 真吉

行水の空へ暗雲迫りくる 硯滴

聯想の何處まで續く雲の峯 柳人

(佳)雲は低くく國境の秋 巷二

席題 愛の巢 巷二選

愛の巢の無事を祈つて母ばかり 墓秋

愛の巢へ朝の太陽まぶしすぎ 柳人

(佳)愛の巢、或る日は壽司で間に合ひ 同

(同)愛の巢に倦念が寝ころがり 墓秋

(同)愛の巢のせまい二階も氣に 柳人

席題 鼻緒、顔

五分間吟互選

違約したその夜鼻緒にある 疲れ 慕秋
 鼻緒すげ夜の女の媚を見る 硯滴 二
 靴々々の洪水へ鼻緒のゆううつ 柳人
 雨の日を鼻緒が切れて子が戻り 眞吉
 病床にある父の顔に骨が見え 祥二
 青ざめた顔へあらたの涙が出 卷月
 さみしい顔です待ち呆け 慕秋
 失戀に顔の艶さへさみしくて 同
 生き甲斐を春の女の顔に見る 同
 不満ありく顔をまげ 柳人

川柳 高知例會(高知)

八月二十一日 於綠々庵 柳澤濁水報

席題 市場

風選

雑音の中で市場の値が定り 同 果
 一通り廻うて買ふ氣のマーケット 同 水
 ふと友の新婦を知るマーケット 同 水
 氣持よく賣つて公設世辭がなし 春風
 騒音の中に儲ける魚市場 狂聲
 同 風選
 化粧するやうに白壁出來上り 柳風
 行詰んだ思惑壁に考へる 翠葉
 設計圖茶の間の壁がもめてゐる 濁水
 押ビンの無駄を幾つも壁へ押し 青果
 叱られもならずさへへる壁一重 濁水
 息子には壁の暗さが氣に入らず 翠葉
 請負は壁も彈じいて顔かせ 濁水
 小料理屋壁一面へ値が貼られ 青果
 留守中を先づ無事だった壁の色 春風
 教室の壁に樂書齡をとり 映珠

新築の披露も壁の香の中で

手が壁を這うて逃られだけのがれ 映珠
 繁昌にこわされてゐる店の壁 濁水
 (客)おびえてる眼に壁の像生さる 翠葉
 (同)秘密など壁は可笑しい様な隙 春風
 (同)一簾を靜に話す壁の色 同
 (同)何代も續く氣で居る倉の壁 同
 (同)赤壁でよく賣れ出した家傳業 濁水
 (人)手を抜いた壁を夕陽覗き込み 柳風
 (地)漢學にたじた恩師の壁が落ち 同
 (天)信仰の強さは壁に灯の型 春風
 (軸)噂した二人が壁に傘を差し 同

兼題 刺青

水選

かけ湯する場所を刺青からはなれ 柳風
 刺青は風呂の狹さを憚らず 翠葉
 刺青と熱湯とに逢ひ面食ひ 青果
 刺青を昭和の風呂でたまに見る 翠葉
 青春を知る兄ノ腕に命の字 狂聲
 (客)刺青がまだ役にたつ町に住み 春風
 (同)刺青を證據に親子巡り會ひ 映珠
 (同)親分の不遇を背の龍も知り 狂聲
 (同)父の刺青を訊れて叱られる 映珠
 (同)名優に成り損つた刺青だ 春風
 (地)刺青の父を氣にする齡になり 柳風
 (人)刺青に世相だんくケチ臭く 春風
 (天)改心をして刺青を汚く見 映珠
 (軸)刺青も生かせと部屋入見送も 映珠

川柳 御旅吟社(大阪)

川柳愛に燃ゆる御旅吟社に屬する 此花區在住の人々相集り紫石居に於て句作に就つた。

尙當日翠夢葉平氏の御話があつた。

藤田紫石報

重役の椅子はご大きくなつてゐる 野洲
 まん中の椅子で女房喋つてる 香峯
 藤椅子へのびくと居る獨りもの 紫石
 ソファ一の影にひそんだ甘い戀 龍美
 (軸)久方の椅子に赴任の酔こち 平選
 (席題)油 油 葉
 油繪のゆがんだまゝで入選し 香峯
 裝飾の油繪ごつしり室にあり 龍美
 油繪の肉體ふつくり盛り上り 紫石
 油繪へ秋風そつとなでてゐる 同

兼題 近眼

夢選

近眼になつて秀才らしく見え 香峯
 近眼鏡漫書の顔に大き過ぎ 龍美
 近眼鏡外すせば間抜けた顔に見え 紫石
 (軸)錯覚も近眼のせいにも仕舞ひ 夢選
 兼題 初戀
 初戀の鏡の顔がはずかしく 夢選
 初戀の傷手故郷にすてゝたち 龍美
 初戀の二人へ時計の刻む音 紫石
 初戀の娘も知らずに年たけ 同
 初戀の味二人の母となり 野洲
 初戀の心世間をせまうゐる 清美
 紅椿はつ戀びとの墓に散り 葉平
 初戀の窓に凭れて日も暮れる 香峯
 (人)初戀も知らず春ゆき夏もゆく 同
 (地)初戀をのせてホートは揺れる 同
 (天)初戀をそつとしまつて嫁に行き 同
 (軸)幻はまた初戀の跡を追ひ 紫石
 夢

眞吉居偶會

九月二日夜

神田眞吉報

指切つた幼い頃が思はれる
 眞吉
 指切つた月に草むら繪の如し
 同
 指切りへ違約するとは思れず
 同
 コホロギの草の廣さへ生きのびる
 同
 名月へ薄の影も淋しくて
 同
 空涙男は背を向け立ち
 同
 久し振り指の丸味も嬉しくて
 同

明珠居偶會 (神戸)

九月十日

西村明珠報

兼題 鶯 卯
 西村明珠報
 葉鷄頭へ物憂い朝の卵吸ふ
 麥刀子
 田舎から卵が来たよお産部屋
 竹風
 ハムレットに決めた男が瘦せて居る
 華水
 諦めた眼へ地玉子の白すぎる
 秋彦
 (佳)コケツコツコツ 卵を蛇(なま)で
 春秋
 土砂降りの中へ水を提げて行く
 麥刀子
 奉行に行く子と食へる栗の飯
 秋彦
 遠足へ行つておいでと病んである
 春秋

席題 清 算 春
 秋選
 清算の男へ秋の風が觸れ
 華水
 清算をした眼へ淡路島が晴れ
 秋彦
 清算をしたい心に暗い影
 明珠
 (佳)清算のそれが壁も塗りか
 吉左右
 (同)清算をする氣で會へば又泣
 竹風
 (軸)清算をしてもう涙なかなし
 春風
 席題 入 口 麥刀子選

愛の巢へ虚無僧しばし吹いてゐる

入口を派手にしてゐる 菊人形

辛棒をする入口を掃き清め

軒燈へ新内流しの長い影

席題 靜 か 五

見學の工場案内靜かなり

青藤逢へない月が冴へてくる

谷川の音にキヤングの夜が更け

勝ち負けの中で靜かに目をむり

水蓮が咲いて靜かな朝の池

叱られて今夜の子供靜かなり

心配へ息子靜かに本が好き

兼題 目の色 清記 五選

叔父の顔チラとぬすんで意見きく

出征に流石は親の顔に黙り

先生の其の目の色へ押し黙り

目の色に出た淋しさを尋ねられ

目の色をぬすみハツキリした返事

歌麿のにせもの青い眼に買はれ

母の目の色へ腕白手をすぼめ

寢不足の目から意見をきかされる

秋霖雨に集ふ (松江)

九月四日午後、秋霖雨にこもる天痴人を訪問

してくれた都之介、巷二、日曜で外出の池田

山紫の四人で雑詠をやり清談をして五時散

會した。(天痴人報)

あきらめて爪切る音も淋しいけれ

待つ身になれば蠅が啼いてる

夜がせまる喜びに饅あて乍ら

カタパンにされて進級ま近なり

春秋

華水

明珠

竹風

幸村

麥刀子

秋彦

明珠

華水

春秋

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

長屋に住んでゐます頼の骨

飯臺を圍む五燭の光りよ

綳帯へ何と冷たき工場主

付け飯に秋がキラキラ練兵場

萩の露俳人の眼へ清冽な

川柳小集 (松江)

八月二十日 夜於合同運送店 久方墓秋報

題 霽 日傘、ホームシツク、影

雨が降るホームシツクに雨が降る

影を見つめてゐるごん底の一人

贅澤な日傘の主に戀がなし

霽さへ不氣味に尖る病上り

不自然な霽を映すシヤンデリヤ

郷愁を喘ふ盆踊のリズムよ

日傘くるく去り行く薄情

日傘の房をもて遊んでる 離別

川柳 梅田句會 (大阪)

題 海水浴 水谷鮎美報

泳がない姉に着物の番をさせ

海水へ電車満員また満員

海水着へお羞しいほど瘦せてゐる

青春が海水浴に冷へてゐる

赤 青黄 海水浴の女連れ

遠泳が海の景色の中にあり

(人)子供供らに海水浴で致へられ

(地)海水浴女を海水浴で友に會ひ

(天)母の手をひき海水浴の晝

(軸)海水浴彼の人を見る足の裏

春二

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(同)海水浴して裏口から歸り
同 水選

金言をあざ笑ふてる友があり
まさる

金言を掲げた便所よごれて
坊茄子

金言の的がはずれた四十過ぎ
鮎美

金言へ俺の心はまつすぐだ
方 眠

金言へかたいばかりが能でなし
同 居

金言へつきあたりたる朝の呼吸
同 居

金言へあまり小さき我ならん
同 居

(人)金言へさもしき心よみかへる
坊茄子

(地)云ひやすし金言はまもられず
方 眠

(天)金言を守るに若き云ふてゐる
白 菊

(軸)金言と別に性格考へる
新 水

題 枕
かほる 選

母の手にならそびかすのまくら
ト 居

下宿から下宿へ枕もつてゆき
鳴 玉

轉宅へ枕だけ置いてゆく
白 菊

寄宿舎の枕よごれたきりになり
まさる

水枕さびしくかけた壺所
真 坊

格氣も知らず枕がぶつて寝てる妻
晚 春

新枕からオイと云ふ聲が出た
同 居

水枕へ替るぐに飯がすすみ
遊 步

青春の枕にうつるなやましき
鮎 美

母と寝る枕のさやの白ろすぎる
同 居

(人)別々に枕をしまふ獨り者
鮎 美

(地)獨身へ何の技巧もない枕
鳴 遊

(天)故郷へ歸るに枕置いとかれ
玉 步

川柳 梅田句會(大阪)

雜誌社 九月二日夜 於晚春居 吉田晚春報 里十九選

飯の味無事息災でありがたし
方 眠

大盛のめしへ荷車ほつとかれ
鳴 玉

病む妻へ水を變へてから茶漬
ト 居

朝飯をすませたあとの腕時計
鮎 美

黒石を持つて晝飯とも云はず
白 菊

すき腹へ飯のこけてる匂ひする
古 木

(佳)叱られて子は飯粒を拾はされ
同 居

(佳)冷や飯を食ふ女中はよく肥り
白 菊

(佳)夜樂の灯弟子を叱つて飯にも
鮎 美

(佳)ぶい漬の離れ座敷が氣に飯に
同 居

題 情
古

小さいまこころが勇士をたすけた
木 選

友情に初めて泣いた水枕
ト 居

悪縁と知りつゝ思ひ断ちかれて
白 菊

あゝ無情しきびのほび鼻をつき
鳴 玉

題 秋の風
方

蓮の葉の露がほるほる秋の風
遊 步

へチマ柵秋風吹いて水を取る
ト 居

秋の風とりのこされたたねなすび
遊 步

友と友ならんで秋の風に會ひ
鮎 美

淋しさに外出すれば秋の風
鳴 玉

(佳)職をなくして秋風は見ゆ
同 居

(軸)秋の風雲をさきよてあはたし
方 眠

題 阪國風景
美 選

阪國の電車に揺れて夕涼み
遊 步

誘惑に勝つて夜の阪國を歩く
鳴 玉

大橋を涼みに渡るこゝろか星
ト 居

ウルトラのふたへ夜のシャズバンド
坊 子

(佳)スタップが踏め阪國バスに揺る
古 木

(佳)六甲は初雪 阪國寒い風
方 眠

(軸)國道の一直線へ秋の雲
鮎 美

(同)ほぶら青々國道のらんでぶ
同 居

席題 來 客 五

來客は賑をほめて汗をふき
白 菊

來客へ茶碗の足らぬ新世帯
遊 步

來客と岐早提灯の下でのみ
鮎 美

突然な來客父は今日休み
方 眠

來客へ葉巻きの煙りワウウサズ
坊 子

來客へはしりでものゝわれる音
古 木

來客へ裸に話の茶を飲め
同 居

來客へ課に話の茶を飲め
鳴 玉

題 夜汽車
方

富士山が墨繪の様な夜の汽車
眠 選

ルームライトなゝ走る夜の汽車
遊 步

寝るつも夜汽車に乗つて立たさ
坊 子

妓の寢息夜汽車にせめてまるか
鳴 玉

夜の汽車淡路の島がういて見へ
鮎 美

雪雪故郷へ夜の汽車が着き
古 木

電報を氣にしながらに夜の汽車
同 居

題 糊
鮎 美

はげてゐるゆかた糊のきゝすきて
鳴 玉

指の糊きたないものゝように拭き
方 眠

老眼鏡へ糊つかぬ西洋紙
坊 子

(佳)障子洗つてる父へ糊の出来
同 居

(軸)糊つけを着せて夫に子ま
古 木

(同)糊つけを着て再婚の話也
鮎 美

川柳 松江例會(松江)

雜誌社 九月一日夜 天痴人報 志原川柳社の法泉子氏、滋愛川柳社の華雪、

曙朗兩氏、澁番同人奥田雪緒黒目大鳥二氏等
をはじめ一九三二年新秋の宵を清しみつゝ
集ふ者二十一名。珍しき盛況に幹事は大喜び
だった。

兼題 風日(二十十日) 都之介選
間違ひも無く豫報旗風と告げ
モヒ注射風日の窓を物憂がり
アンテナの光も鈍し風日の曇る
アナウンサー明日の風日は曇り
明日風日不安を抱く稲の出来
農村救済二十十日の空模様
二十十日なり故郷の事が思はれる
羊の葉が鳴つて来ました風日です
百姓の悲喜を包んで風日去り
陽はをちめ明日の風日も知らぬ様
稻花の満開だ風日の空曇る
(秀)寝てるより外に仕方のない風日
(同)明日に待つ風日不氣味な空
(同)蝗跳れて風日とは知らず
(同)明日に待つ風日笑陽が落ち
(同)風日の夜またまた笑の落る音
(同)風日からもう儲かつた氣で話
(人)今日は風日がいなサラリマン
(地)狂亂に似たる風日の密林地
(天)女郎屋の二階涼しい風日なり
兼題 店先 巷 二選
店先は安物ばかり並べられ
店先は番茶の匂が香り出し
見切品店先狭く飾られる
店先をあふながらせて馬が拘ね
店先へ並べるのにも一思案
一選 二選
踏人 廣葉 法泉子 馬耳郎 祥月
暮秋 柳人 真吉 硯滴 硯二 朗人 玲人 暮秋 法泉子 柳人

精米機の音にも慣れて雀来る
店先へ亂れを殘す傘の雨
店先へ椅子を並べて下手将棋
店先を順々座る支拂ひ日
店先へ大きく響くレザスタ
よい庭を見せ店先開け放ち
(人)注文を店頭へ吊り提灯屋
(地)店先へ座るだけなり薄化粧
(天)店先へ未だ出たうない高島田

兼題 第三者 嘆
第三者同志批評をはからず
第三者でばないらしい顔の色
解決に出たは無難な第三者
活劇の夫婦へひよいと第三者
言ふ程に機智をもたない第三者
第三者その面でかと馬鹿にする
溜息を馬鹿らしく聞く第三者
第三者只黙々と聞いてやり
何故とめたかと仲裁へ飛かり
(人)瞬間の技巧を知つた第三者
(地)泣きたさを第三者から支え
(天)真相を知るはばるかな第三者
兼題 梨、裸体、雪緒天痴人大鳥選
出来榮と別に涼しい梨畑
工場へ来た梨賣は取巻かれ
裸体書は委かされたやうな手を支え
梨舗でしやうと女給に手ま、
ハンカチを振ると悲しさ迫る様
満員の汽車ハンカチの風を入れ
艶のない顔の女が梨を喰ひ
一選 二選
暮秋 柳人 雪緒 朗人 玲人 天痴人 都之介 嘆朗
雪緒 朗人 天痴人 柳人 暮秋 都之介 嘆朗
雪緒 朗人 天痴人 柳人 暮秋 都之介 嘆朗

貸浴衣梨一皿で呑むビール
梨をむく手に新妻の型があり
二ツ三ツ抱へて梨畑から追はれ
女囚徒の泪ハンカチさへもなく
混浴に佛心の瞳を射られたり
果敢店先の走りへ如才なし
掛取りの裸のまゝで断はられ
抱きしめてみたい裸体の沈黙だ
嫁の里忘れさせない梨が着き
一切何が何ともいへぬ梨の味
寢姿へ硬ばつた瞳の裸体像
川柳 螢ヶ池座談會
九月十八日 石森静太郎
兼題 工 事 龜井愚龍選

兼題 工 事 龜井愚龍選
圖面師は工事場所も聞いて見る
板圍ひ聞きカフエーになるさうな
掘あてた骨へ工事場さばるさうな
工事場の秋は手斧が響くだけ
工事場に水溜つてる雨つゞき
工事場にスコップ立てし晝さがり
工事場へ近所の小供よつて来る
工事場に月ひつかつて寒ひ夜
工事場へ胸病む男ひより来る
失業の身に工事場の派手な音
市電から見れば遅々たる基礎工事
(佳)工事場の雨音もなく夕暮れる
(同)鉄損の會社と見えぬ大工事
(同)鮮人等のタナル眞しるき朝だ
(同)工事場は通る女を歌に朝
(秀)やまひ癒えず裏に工事が捗
【以下次號】
同 翠句郎 天痴人 嘆朗 玲人 法泉子 柳人 廣葉 祥月 都之介
一 公行 青鬼 紅蕩 定城 王手 憤兒 静太 作築 六華 巷巴 青鬼 静太 行水 憤兒

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本が、こんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へば、古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次で、公立社の棚なのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。
(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五六一番

松江甦生一周年記念句會
日時 十一月一日夜八時ヨリ

(所) 松江市寺町龍昌寺内
(題) 「一年生」 路郎先生選

「菊人形」 あん馬先生選
幹事 廣江天痴人

女給を募る

二十二三までの朗らかな方、美しい方をお世話下さい。一腹乃

大阪市西成區玉出本通
三ノ三六(仲小路)

喫茶店 **キンダ**
電話 茶屋 二五七九番

高知柳壇千回記念大會

(日時) 十月十六日夜
◆會場問合せられたし

高知市本與力町
幹事 中澤 濁水

蟹ヶ池支部句會

(日時) 十月九日午後一時
(所) 大阪阪急沿線刀根山病

院内
幹事 龜井 愚籠

天王寺支部句會

(日時) 十月一日夜
(所) 大阪市天王寺區大道三

内藤製作所
幹事 須崎 豆秋

短冊頒布

筆者 麻生路郎先生
上知冊一葉金麥園 送費不要
作品は入金順に發送、振替
は大阪七五〇五〇〇を利用
されたし(句の希望の方は
お知らせ下さい)

申込所 大阪市住吉區平野西之町
八三番地
川柳誌社事務所内、
短冊頒布係

懸賞川柳募集

「表情」 路郎 選
十月十日締切
その他雑吟を募る

▼用紙 官製ハカキ(化粧柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟 麻生路郎氏宛

大阪市玉出本通三の三六
化粧新聞社

綠雨居偶會

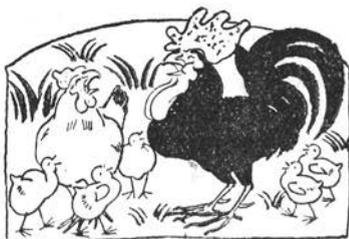
十月五日午後六時
兼座(郊外)
會費 不要

本社事務所にある他の柳誌を見
なから語りませう。

川柳手拭

社告
一枚 路郎主幹
金拾五錢
(送料共)

の染筆



編輯の窓

樓雨山

▼編輯の夜、しつとりと露を
いた草、耳を覆ふ虫の聲、淡い
星の光に見送られて歸途につい
た。主幹が「すつかり秋だなあ
」とつぶやかれた一言は川柳
の精進はこの秋だ、と激動され
たものとして今に耳から消えぬ
▼その夜の編輯に限って縁雨君
は夜に入つて勤務から戻つて來
た。服を脱ぐなり、疲れたさま
も見せず大車輪であつた。近頃
君の健康も本格的になつた。社
にとつてこれはご力強いことは
ない。

を執筆された。まだホントの身
体になつてゐられないのと思
ふと一篇だけでも有難い譯だ。
町二君も「嘘と眞實」に健筆を
ふるつた。其他の讀物も少なく
ない。殊に創作欄には秀吟が揃つ
てゐる。幸ひ愛讀愛語を祈る。
▼長野吉高氏から「柿の皮」を
頂いた。味のある隨筆。こんな
のが十篇ばかり揃ふと差詰め文
藝春秋の向ふを張ることにな
るんだが。
▼「武玉川初篇研究」は益々好
評。ところが清記の勞をとられ
てゐる蛭子氏が近頃持病に悩ん
でゐられるので心配に堪えぬ。
▼本號から「飛燕往來」が復活
した。私信を發表することはな
るべく避けたいが、面白い通信
や、害にならない消息の公開、
私するには惜しい書簡などもあ
るので發表さして貰ふことにし
た。これはと思ふものには省略
や伏せ字を用ゆることにした。
御諒解を乞ふ。

▼社の都合で三日に本社
の柳翁記が例のちとせ俱樂部で營ま
れた。當夜は主幹の熱辯を期待し
て集まれた柳人が少くなかつ
たが、主幹はアトトちゃんの見
護のお疲れで臥床、遂に姿を見



雨 緑

西之町MEMO

▼松江支部では支部誕生一周年
に相當するので一周年記念句會
を十一月一日火曜日夜松江市寺
町龍昌寺で開催されます。當夜
の幹事は柳人、暮秋、朗人、廣
葉、都之介、天痴人の諸氏
▼高知支部の幹事中澤濁水君が
高知新聞で「高知柳壇」を開設
されて既に一千回に相當するの
で来る十月十六日夜記念大會を
開催されます。本社から路郎先
生、新水、鮎美、京郎の諸君が
出席される豫定です。

君自ら大いにサービスされてあ
られました。三日夜襲人、町二
山雨樓、丹路、亂耽、杏三、夢
裡、水車、新水、夕鐘、鶴足の
諸君と私が祝福のため乾杯をし
て歸りました。

▼社友越田久水君が今春上海事
變のため金澤工兵隊から召集さ
れて支那各地に任務を果して六
月無事歸還されました。凱旋後
高岡新聞の柳壇を復活されて今
後大いに「川柳雜誌」のためにも
努力されるとの事を知らして
來ました。

▼社友立井登美坊君から松花江
が氾濫してハルビン全市の三分
の二まで浸水したため、悪疫流
行し、コレラ戦線異状ありと云
つて來ました。外に馬占山死亡
當時のピラ、水害の時のピラな
ど多数送つて來ました。それ等
のピラは特務機關第二班で作製
されたものだそうです。

▼箆云支部幹事尼縁之助君が來
る十月八日に來阪されることに
なりました。大いに期待してゐ

▼同人庄萬よし君が開業十五周
年に相當するので九月一日から
五日まで大賣出しをされて店頭
で記念川柳を募集され、萬よし

せて頂けなかつた。其後のアトちゃん(ケン)快方、遠からず登校される筈。特に御心配なすつた方々に私からもあつて御禮申上げます。

▼十五日湊町の鐵道クラブで同人社友會が開かれた。當夜は晩から篠突く雨で大いに氣遣はれたが、主幹を初め綠雨、琴人、杏三、丹路、かほる、里十九、新水、翠夢、水車、おさむ、夢裡、鶴峰、夕鐘、豆秋の諸君が出席されしんみりと社の事業、其他の件について打合をした。「川柳の夕」以来の最初の同人社友會なので一入懐しみを覺えた。

▼同夜主幹から「川柳の夕」に對する決算報告をされ、併せて當時委員として多大の努力を拂はれた諸君へ重ねて感謝の意を表する爲め主幹染筆の短冊を頒つた。當夜出席されなかつた諸君へは追送することはなつてゐる▼二十日の晩阪大川柳會では丸島利生氏が佐渡から歸郷されたので、その歓迎會を開催された

が、肝心の利生氏に急に差支へが出来たので、主人抜きで歓迎宴があつた由。その散會後万よしへ顔を見せられたのが路郎先生と柳秀氏。主人公が不在なので開店十五年を祝して次の句をのこして去られたさうだ。

ごや〜と來て万よしの串の
數 路 郎

上かん屋うだ〜云ふて金に
なり 柳 秀

▼「川柳の夕」で好評を博した路郎主幹の句を脚色した喜劇「戀の窟あゝの眼だらうか眼だらうか」がその後新町の演舞場でされ、去月十三日には更に朝日會館で古川利隆氏一派によつて上演された。僅々數ヶ月に三回の上演は首尾がよい。

▼社友熊谷紅君によつて次第に延びて來た「柳の芽」は句の秋を迎えて益々活躍を續けてゐる

▼南海へ行つて一杉、夏曉、貴山の諸君に會ふ。一杉君のころでもう三十分もすれば手があくと聞き、そこは待つことに眼の飽かぬデパート、エスカレーターに五六ヘン乗つて見た。

ます。

▼京都支部の平岩司郎君が加茂川句會が益々盛大になるので大いに喜んでゐられます。幹事としての勞を感謝せずにはゐられません。

▼釜ヶ池支部では九月十八日支部の方々皆集つて川柳座談會を開かれました。

▼社友岩垣奇可愛君が永らく病臥されてゐられたさうですが、この頃全快されました。

▼社友木村晃卓君が相變らず悪くて自宅で安靜されてゐられるさうです。一日も早く快癒される事を祈ります。

▼社友市場没食子君の令弟が八月一日不慮の死をとげられたさうです。哀悼の意を表します。

▼舊社友岡崎桂枝君は暫く柳界から遠ざかつてゐましたが、この頃餘假が出来たので作句に復活されることになりました。

▼新設された京都送放局から八月廿七日午後二時「川柳東山めぐり」を放送されました。被講山川紫明君、解説後藤千枝君。

▼奉天川柳會の主催で事變川柳大會を九月十七日午後四時から奉天字治町蓮華寺で開催され、事變戦死者追悼會を行ひ、閉會後建國祝賀宴を催されました。

▼「梅鉢」金澤市笠町加能合同銀行内加能川柳社。創刊號を發行されました。

▼「川柳青龍」静岡市安西丁九二青龍川柳會から創刊號を發行されました。

▼蟠螂川柳社から發行されてゐた「蟠螂」は八號限りで休刊されることになりました。

▼藤原晴山君が病氣で大阪市民病院へ入院されてゐます、一日も早く全快を祈ります。

▼本號の編輯は路郎先生、琴人町二、丹路、山雨樓の諸君と私とで本社事務所で致しました。

投稿規定

- ▼ 投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼ 「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▼ 「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼ 光耀抄は女性作家に限る。
- ▼ 各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼ 文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼ 書體はなるべく楷書「川柳雜誦原稿」ご封筒に朱記する事。
- ▼ 締切は嚴守されたし。
- ▼ 投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第九卷第十二號課題

十月五日締切

(各題十句以内)

- ▼ 嵐 關本 雅 幽選
- ▼ 懷手 中澤 濁 水選
- ▼ 情熱 水谷 鮎 美選

第十卷第一號課題

十一月五日締切

(各題十句以内)

- ▼ 雪 川村 花 菱選
- ▼ 炭 麻生 葭 乃選
- ▼ 失望 生田 翠 夢 共選
- ▼ 阿形 一 杉

每 號 募 集

- ▼ 近作柳樽(十句切) 麻生 路 郎 選
- ▼ 光耀抄(廿句切) 麻生 葭 乃 選
- ▼ 各地柳壇(會報)
- ▼ 文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈禮廣告)の用件は下記川柳雜誦社事務所宛に願ひます。

價 定

- 一 部 金 參 拾 錢
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢
- (半々年分以上御送金の方)
- (は投句用箋を贈呈致します)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼請代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誦に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年九月廿五日印刷
昭和七年十月一日發行

第九卷第十號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 麻生 幸 二 郎
發行所 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 川柳雜誦社
振替大阪三二一五一四番
電話天下茶屋二五七九番
電話天王寺一六七番

事務所 川柳雜誦社
大阪府住吉區平野西之町八三番地

賣捌書店 (大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
(東京 仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、寶文館(願館) 石塚
(京都) 三宅 (松山) 弘文會 (石川縣) マコトヤ

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝
く
美
髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提けて来る
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち
 百事意の如く白鶴呑んでる
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
 腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
 白鶴が縁こはなりぬ君も僕
 白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



にきびとり

び が ん す ろ

美顔水

おもしろ
面白い様に効く！

年々の信用！的確の効果！

▲ニキビ吹出物に——頑固なニキビ吹出物にも本當に前か、而も何等の副作用をも伴はず、目に見えてよく効くので非常な評判です！年來の信用！効果は彌々向上してゐます！

▲眞正の美の成長——尚ほ少量づゝ常用すればニキビ吹出物を防ぎ、適度に脂肪を去り、キメを細かに艶をよくし、磨き込んだやうに美しくなりますので大へん喜ばれてゐます！

▼素顔の美を貴ぶ

御家庭人の親友▲



大正十三年三月三日第三種郵便認可(毎月一日發行)
昭和七年九月廿五日印刷
昭和七年十月一日發行

川柳雜誌

(第一〇五號)

定價 金三拾錢